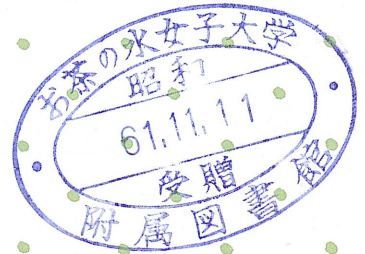


幼児の教育 11

1986

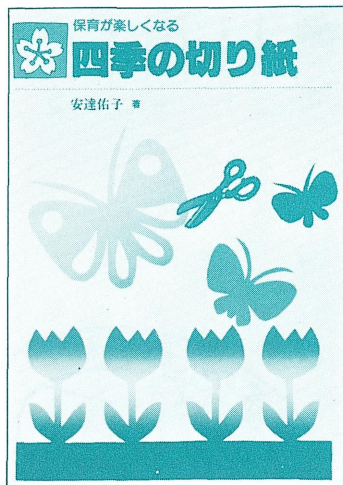
家庭・保育所・幼稚園



保育が楽しくなる

四季の切り紙

安達佑子・著 B5判・128頁・定価1,600円



絵で見てすぐに教えられる
切り紙指導の入門書

- 切り紙は、子供たちに指先を使って物を作ることを体験させ、さらに知的発達を促す効果も大きい、理想的な製作遊びです。また、その季節に題材した切り紙で保育室を飾って、いっそう明るい雰囲気盛り上げるのも楽しいものですね。
- 本書は、〈花火〉〈赤とんぼ〉〈雪〉〈ひなまつり〉などなど、四季折々のテーマごとに作り方のポイント／ヒント／作品の飾り方を解説した切り紙指導の入門書です。イラストを豊富に使った解説は、紙工作にまだあまり慣れていない方にもわかりやすく、また題材もかんたんにできるもので構成しました。
- 資料として、切り紙の歴史、切り紙の基本的な理論、子供たちに初歩から指導していく際の具体的な方法なども備え、切り紙研究・指導者として現在活躍中の著者の知識と経験が全編に込められております。

内容

四季を切る

- さくら
- チューリップ
- ちょうちょ
- こいのぼり
- しゃぼん玉
- あじさい
- 海
- 花火
- 赤とんぼ
- クリスマス
- 雪
- ひなまつり

折り方とその作品

各折り方の説明とその作品

資料編

切り紙の歴史と生活とのつながり
折った角度・面の数
多角形のつくり方
指導の実際

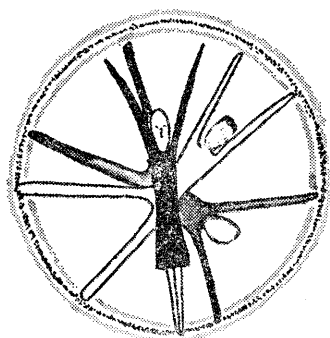
好評発売中!!

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十五卷

第十一号

幼児の教育目次

— 第八十五卷 第十一号 —

© 1986

日本幼稚園協会

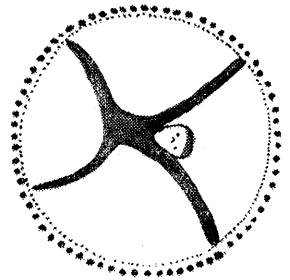
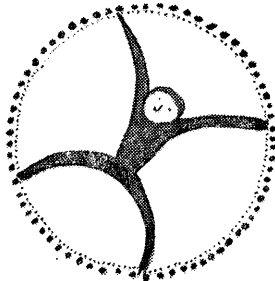
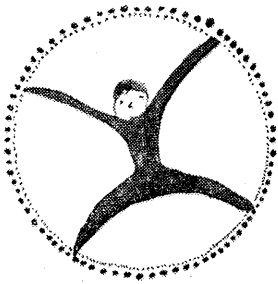
世界の幼児保育者との協力

— 世界幼児教育機構 世界大会に参加して —……………津守 真……………(4)

SF的読み解き、子どもという風景

第十九回 お店屋さんごっこ……………堀内 守……………(16)

自然とのふれあい(その2) — 草餅つき —……………斎藤 芳子……………(25)



子どもの遊び(その7)……………E・A・A・フェルメール 浜口順子訳…(30)

『子どもへの愛』の社会学(3)……………山田 昌弘…(39)

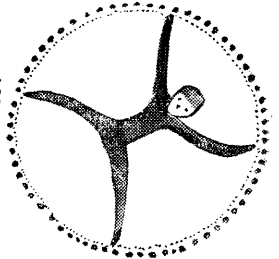
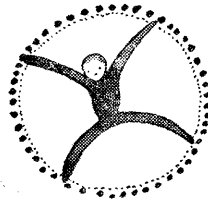
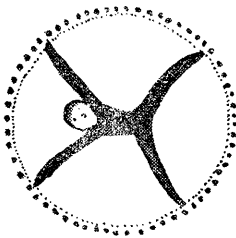
兔園随筆②

痛い痛いのとんでいけ(その七)……………蕪木 寿江…(44)

メイド・イン・神さまの子どもたち……………山下 史路…(51)

若いお母さんたちへ……………はるにれの会 友定 啓子…(56)

カット・福田 理恵
編集部・小澤 誉子
土屋真美子



世界の幼児保育者との協力

——イスラエルで開かれたOMEPP

(世界幼児教育機構) 世界大会に参加して——

津 守 真

会場のラロムホテルのロビーで、一日のスケジュールのあと、疲れをいやしながら、ジュースをのんでいるとき、わきに坐っていた若い参加者と話をすることになった。二人はスイスの人で、他の二人はアルゼンチンからきたということだった。スイスの女性は、保育園の先生で、朝六時から夕方六時まで子どもをあずかるのだという。もちろん、大人の方は時間交代で、一週四十二時間制である。アルゼンチンの若い女性は幼稚園の先生で、

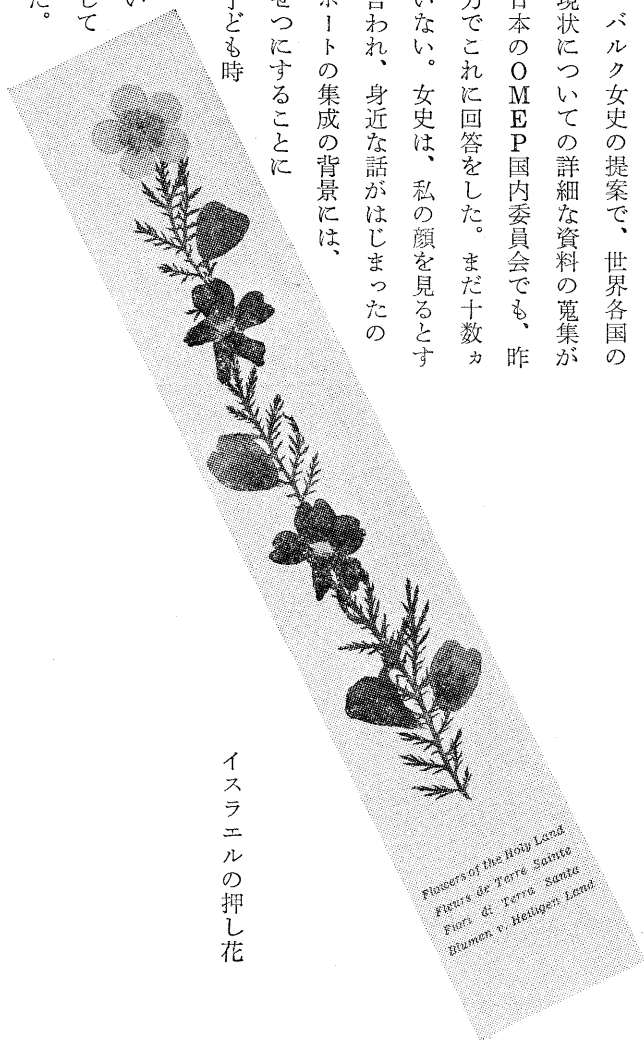
ひとりではスペイン語しか話せず、もうひとりの人がたどたどしい英語で通訳しながら会話をする。田舎の方にゆくと、一クラス六十人もいる学校があるという。妻と私と、ゆっくりと話しながら、この大会は、現場の保育をしている人たちが集まってきていることを実感した。この若い人たちは、自分たちはこの高級ホテルには泊れないのだといって、夜遅くなってから外に出ていった。

会場のホテルの朝食では、OMEPPの幹部の人たちと

顔を合わせる機会がある。野菜とチーズと果物を好きなように取りながら、豊かな朝食がはじまる。ある朝、一緒になったノールウエーのバルク女史は、百歳になる母親がいるという。こうして人間の一生を見ると、子どもには、子ども時代を生きる権利があることがはっきりとわかりますねと語る。バルク女史の提案で、世界各国の幼児の保育と教育の現状についての詳細な資料の蒐集がはじめられている。日本のOMEPP国内委員会でも、昨年、加藤定夫氏の尽力でこれに回答をした。まだ十数年国からしか集まっていない。女史は、私の顔を見るとすぐにこの回答の礼を言われ、身近な話をはじめたのである。客観的なレポートの集成の背景には、幼児期の遊びをたいせつにすることに、とどまらず、人間の子ども時代を生きる権利がそこなわれることがないように静かな戦いをしていく情熱が感じられた。

世界理事會

OMEPP（世界幼児教育機構）の第十八回世界大会は三年に一度開催されるが、今回は七月十三日から十七日まで、イスラエルの首都、エルサレムで開かれた。それに先立って、七月十日から二日間と、大会終了後の十八



イスラエルの押し花

日に、世界理事会が行われた。私は、O M E Pの世界大会に参加するのは、今回が最初であるのに、この二年間余、日本の国内委員会の世話役をしてきたので、理事会に出席することになったのである。土山牧羔、石垣恵美子両氏と最終日には大戸美也子氏が陪席された。

理事会では、円く囲まれたテーブルに、参加六十数カ国の小さな国旗が置かれ、一国一票の投票権をもつ。世界総裁のグタール女史の司会のもとに、簡潔に意見がたたかわされながら進められる。重要なことは、その都度、挙手による採決をしながら、賛成、反対、保留の数をかぞえてゆく。役員の選挙は無記名投票である。言語は、英語、フランス語、スペイン語で、同時通訳がなされる。

今回の理事会で、インドが正式に加盟が承認され、タイとシンガポールが、準備委員会を作ることが承認された。また、グタール総裁は、二期満了し、規約により改選され、バルク女史が次期総裁に選出された。グタール女史は、今後、ユネスコ連絡委員として活躍される。三

日間にわたる理事会の議事は、きわめて多いので、次に、私にとって関心の深いことを二、三のべたいと思う。

第十七回ジュネーブ大会の決議について

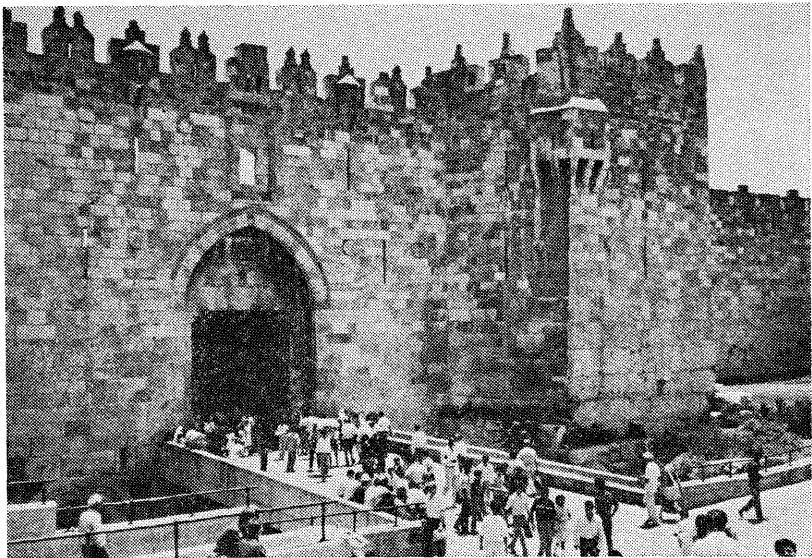
前回のジュネーブ大会では、次のことが決議されており、その後の各国の実行状況について、各地域（世界が七つの地域に分れ、アジア地域は、従来、オーストラリアと日本のみである。クレグ女史がこの地域の代表者である。）からとりまとめて報告があった。決議は大略次の通りである。1 発達途上国の子どもの栄養失調の深刻な現状について、適切な方策を促進させること。O M E Pは国内委員会を通して各方面にはたらきかけ、それを次期大会に報告すること。2 先進国の幼児教育のモデルを、無批判に発達途上国に移入しないこと。各国の文化伝統等が尊重されねばならない。3 子ども保育の機会均等について 4 暴力と戦争を阻止し、子どもの未来に対する希望を拡大すること。5 子ども

権利宣言（国連）の推進。

いずれもここで詳述することのできない大きな問題であるが、世界の各国は、それぞれの可能な範囲で、これらの問題に関心を寄せ、協力しようとしている。

保育の実践者にとっては、子どもと共に過す小さな時間と空間が大切なので、世界という大きな舞台にまで眼がひろがりにくい。しかし、小さなことを大切にすることを世界中の保育者が確認することもまた、世界的な規模で必要とされる時代になっている。そうでないと、保育実践者の頭上をこえて、大雑把なプログラムが支配することになりかねない。こういう点で、日本でも、皆で交代しあって、世界機構に協力しつづけることは重要であると思う。

平和教育の問題について、昨年、OMEPP総裁グタール女史がユネスコ出版物として、“Seeds For Peace—The Role of Preschool Education in International Understanding and Education for Peace”（平和のための種子——国際理解と平和教育における幼児教育の役



ダマスコ門

割」を書かれた。子どものときに、幸福で平和な体験をすることがなかったら、大人になって、他人の幸福と平和のために戦う人間となることはできないだろう。平和のための教育は、家庭、幼稚園、保育所の毎日の保育そのものである。この出版物は、こうした趣旨で貫かれている。この中に、いろいろの国の保育の実際が言及されているが、日本についての記事は「日本製の精巧なタングの玩具」のことだけである。ちなみに、スウェーデン政府は、一九七九年一月八日に、戦争玩具を禁止しているし、EC（ヨーロッパ連合体）は、一九八二年に武器玩具を禁止している。平和教育というと、特別な運動に参加することという考えもあるが、ここで考えられていることは、もっと日常の身近な生活の中で葛藤を平和的に解決すること、生活の中で平和の体験をすることである。

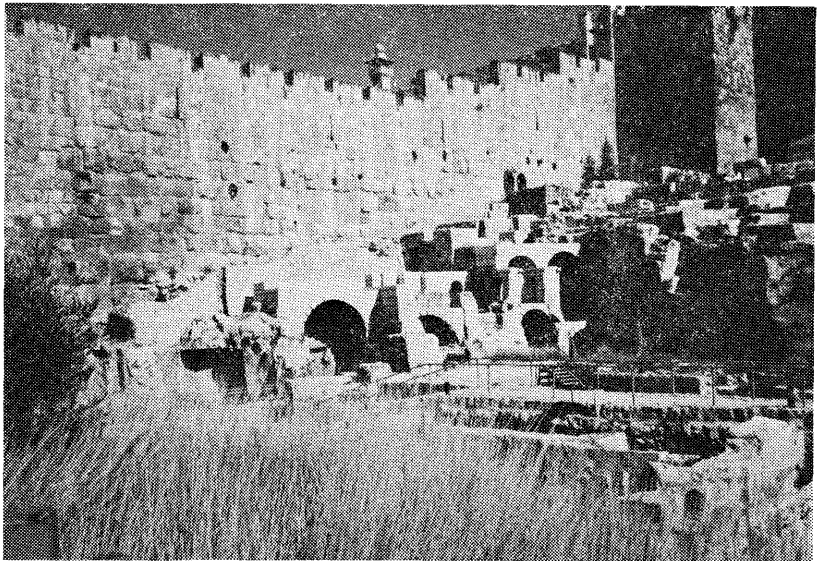
教育と保育の用語について

地域分科会でジュネーブ決議について項目ごとに検討

していたとき、私は、教育と保育は分ち難く、両者を含む概念が必要であることを述べたところ、いろいろの人が直ちに関心を示した。排泄、食事、衣服の世話の中に教育があるし、教えることだけを切り離してとり上げることは幼児期には困難である。またこの両者を分離して行政的な制度とすることにも無理がある。最近OME P で使いはじめている、*ecce* (*early childhood care and education*) というのは、ひとままとりの単語になっている。日本語の「保育」という語は、これに対応する単語ともいえる。しかし、*care-and-education* とすると、教育から養護の機能を排除することを承認する恐れもある。こうした議論が相互に交わされた後、オーストラリアの委員は、これをわれわれの地域の提案として理事会に提出しようという。早速、その次のセッションの最中に、規約の用語改訂の案として、私にメモが回されてきた。しかし、これにはまだ多くの議論が残されているし、両方の国内委員会で合意した上で共同の提案となるので、今後、積極的に研究し、情報交換をして、次の

世界大会に提案することになった。こうしたこまかい点の打合せは、かなりたっぷりとられた休憩のお茶の時間になされる。理事会は朝八時半に始まり、夕方六時までつづく。日本人は勤勉だといわれるが、会合に関しては、西欧人の方が勤勉であるように思われた。

理事会が終った金曜日の夕方から、イスラエルはサバト（安息日）にはいる。すべての公的活動は停止され、バスやタクシーも動かなくなる。これまでくつろいだ服装で働いていた人たちが、白いスーツにネクタイをしめ、少年や青年も正装して、家族そろって誇らしげにシナゴグ（ユダヤ教会堂）にゆく。建国間もないイスラエルの人々の気概と緊張感を感じさせられる。空港の税関では、極めて厳しい検査と訊問があるか、ひとたび国内にはいると、秩序ある清潔で健康な社会という印象を受ける。石造りの近代的建造物には、モダンな彫刻が施されており、裝飾的ヘブライ文字に見るように、芸術が人々に評価されているように思われた。



三千年前の発掘現場

サバトが終る土曜の晩から、新市街のショッピング通りは、再び若者たちで賑わう。その翌日から、次のサバトまでの期間に行われた世界大会には、日本からも三十数名の方々が加わった。

エルサレム

この特別な町で、ということが会期中に何度もいろいろの人から言われたが、今回の世界大会の開かれたエルサレムは、世界中に類のない特別な町であった。近代的な新市街とは別に、堅固な城壁に囲まれた旧エルサレムは、二千年前からこのようだったのではないかと思われた。ユダヤ、アラブ、アルメニア、キリスト教の四つの居住地があるが、旅行者には区別がつかない程、全体がパザールの混雑の中にある。小さな土産物屋、宝飾売店、野菜果物の市場、金工、革工具店、香料の匂い、石畳みと石のアーチのつづく露路、路の両側の石壁の内に迷路のように連なる住居。その中にペテロの閉じこめられた牢獄があり、また、数知れない教会がキリストの歩

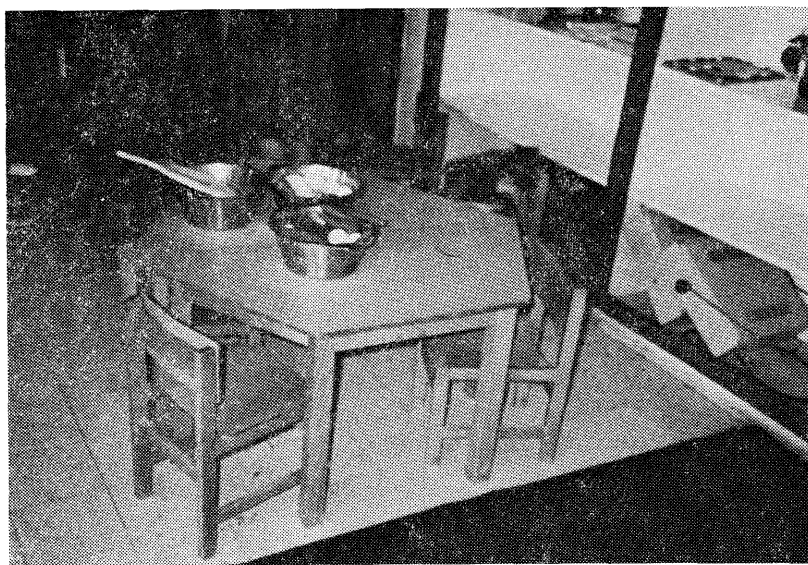


夏季保育
1

んだ遺跡の上に建てられている。城壁の四周には、ヘロデ門、ダマスコ門、ヨッパ門、シオン門、糞の門、美麗門、ステパノ門がある。最後の二つを除いて、あとの門の入口は、人々の雑踏で賑い、両替屋がある。紀元七〇年に、エルサレムはローマによって破壊されたが、その後、トルコ、十字軍、最近はシリアとの戦争などにより、何度も破壊と再建がくり返された。二千年を通じて、怨念と抗争が塗りこめられ、しかもそこがイエスの生涯の最後の地であるという不思議な町である。

大会の十日間のエルサレム滞在中、夜になると、ホテルから谷をひとつ隔てたエルサレムの城壁を眺めた。その内部に、あの喧騒と幾多の歴史が渦巻いていることを想像するのは困難なほど、壮麗な城壁は夜空に静かに浮び上っていた。

大会が終わってから二日間、日本の旅行団と一緒に、ベツレヘム、ラケルの墓、ベエルシバ、死海、マサダ、クムラン、エリコ、ナザレ、ガリラヤと旅をして回る事ができたのは幸いであった。ゆけどもつづくネゲブの砂



夏季保育
2

漠の果てにあるベエルシバでバスをおりたときには、日本では経験することのない熱風を知った。聖書にあらわれる土地は、人間の生存にとって苛酷な自然の中にある。けれども、ガリラヤ湖畔だけは、緑と涼風の吹く快い場所であった。イエスはここを好まれたことを思っ
て、安堵感を覚えた。

この地から人類の偉大な精神が生れたことを思うとき、この町は特別な町である。しかし、精神は具体的な空間と時間の制約をはなれて生きる。固有の伝統的文化は尊重されねばならないが、人類に共有されうる精神を内に含まなければ、その文化は抗争の因をつくるのであろう。

実にこの町は、いろいろの矛盾をはらんだ特別な町であった。帰国してしばらくたって
も、その熱気が身体からはなれない。



夏季保育

子どもたち

イスラエルの飛行機の中で、すでに子どもたちは賑やかである。新市街には公園も多く、至るところで子どもたちの笑い声がきこえる。ユダヤ教の戒律には厳しいものがあるが、その中に子どもを大切にする伝統があるようだ。イスラエル博物館には児童館があり、多勢の子どもが博物館で遊んでいる。

新市街に住む現代のイスラエル人は、まだ独立したばかりのこの国の建国の理想に向けて前進する人々である。

大会で用意された施設訪問の中に、新興住宅地につくられた児童館の夏期保育があった。ここでは、二十人ほどの三、四才児が室内で三輪車にのったり、ブロックをしたり、思い思いに遊んでいる。ひとつのテーブルに、おやつ野菜サラダを作る準備がしており、一緒にいったヨーロッパの年輩の婦人保育者たちは、すぐにそこに坐って果物の皮をむきはじめる。私は子どもの中に坐って積木を手渡したりしていると、間もなく私の肩によじ



エルサレム旧市内にて

上ったり、頭に飾りをつけてくれる子どもがあらわれる。いつのまにか、数人の子どもたちが私のまわりで遊びはじめた。日本の幼稚園にいったときとかわらない。

保育をしている若い婦人は、十四年前にロシアから移民してきたのだという。子どもたちとの会話は、ヘブライ語である。日本からは遙かに遠い国、ロシアのユダヤ人でも、子どもを生かす保育をする人を見出して心強く思った。

エルサレムの城壁の中の旧市内にゆくと新市街とは全く違った光景がある。

バザールの雑踏の中で、一シケルで絵はがきの束を買ってくれと少年が追いかけてくる。土産物店の前で立止ると、子どもが次々に品物を見せる。子どもたちはこういう労働によって大人の社会に直接に参加している。かならずしも不幸とはいえない表情であった。だが、子どもの独自の世界をそこに見出すことはむづかしい。そう思うのは、暑い日射の中を疲れて足をひきずる旅行者



エルサレム旧市内にて
2

の、余裕のない眼のせいかもしれない。比較的静かな石畳の、住居と思われる石の側壁から出てきた子どもたちが、三輪車をひっくりかえし、車輪を回して遊ぶ姿に出会ったとき、この中にもさまざまな生活があることに気が付かされた。

今回の大会で、私は「子どもの世界の理解」と題して、実践と省察の循環反復によって保育が成立し、そこに子どもの世界が生み出され、保育者の成長もまたそこにあることをのべ、倉橋惣三の保育論を紹介した。私の話の中に障害をもつ子どもが登場した故であろうか。そのあと何人もの方々が、自分も障害をもつ子どもの保育をしていると話しにこられた。

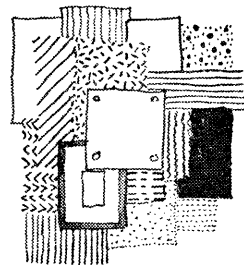
障害をもつ子どもの保育も、普通の子どもの保育も、いずれも子ども時代をたいせつにし、遊びを中心とすることにおいて、かわりはない。同じように考える人たちが世界中にいるのを知ったことは収穫であった。

次回の世界大会は三年後にロンドンで開かれる。

(愛育養護学校)

第十九回 お店屋さんごっこ

堀内 守



交換と交歓

小学校の二年生になると、算数の授業で「お店屋さんごっこ」をやる。グループに分かれて、それぞれが文房具屋さん、お菓子屋さん、魚屋さん、八百屋さんといったぐあいに商品を並べる。紙製品が主になる。花屋さんなどが、かわいらしい花を並べることもある。

近ごろは、世情を反映してか、お店の様子も変わってきた。「お店屋さんごっこ」に登場する商品にマイコンが現われたり、マンガ専門の本屋さんが登場したりする。

店の業態は変わっても、小学生のことだから、「客」を呼ぶやり方は昔とさして変わらない。

「いらっしやい、さあ、いらっしやい」

「お安くしときますよ」

などと呼びかける。

約五十分間の授業のうちに現出するもろもろのシーンはすべて「交換」を中心にした人間の動きである。

これを見ていると、「交換」は「交歓」に通じていることがよくわかってくる。

シカツメらしい人はこれを見てマユをヒソめるらし

い。「こんなにわいわい遊んでいるだけで、きちんとした授業になっていない」というわけである。

さて、はたしてそうなのか。その辺から考えよう。小学校二年の算数——という「教科」の中に押し込めたのではもったいない。ずっと以前からの蓄積がこんなににぎやかな上演となって現われてくるのだという見通しを立てる方がゆたかになる。

「ごっこ」の様相

「ごっこ」の登場は早い。動くものを目で追い、イメージと戯れることは想像される以上に早い時期に出現する。その素型を求めていくと、どこまで行っても明確なスタートラインを決めることはできそうにもない。とにかく漠然としているからである。

そこで、私たちの直接の経験を頼りにしよう。

入園数日目の四歳児を手がかりにしてみることにする。この場合の「ごっこ」の姿は、みずから進んで遊ぶというよりは、幼稚園の中にしつらえられてあるままご

とコーナーが子どもを誘う。しかし自分で勝手に近づかない。教師の方を見、暗黙のうちに「あちらへ行ってもいいのかな」という表情を見せる。

こんなとき、そばにいてくれる教師が肯定のことはを発すると、子どもの動きはおだやかになる。近づく。お皿やスプーンなどを眺めたあと、ふたたび教師の方を向いて「さわってもいいのかな」という表情を見せる。

これをことばに出して言えず、もじもじしているところが見のがし得ないところである。

「さわってもいいよ」と教師が認めてやると、はじめは珍らしげにさわり出す。そしてお皿やスプーンを並べはじめる。

こんな場面はあまりにも当たり前の場面だから、ふつうは人の関心の対象ともならないくらいである。いずれも、のりこえていくべき小さな場面だと見なされているからだ。ところが、この小さなシーンを少していねいに検討してみると、そこには小さいながら、まことに意味のある筋立てが看取れるのである。この点を念頭にお

いてもういちどこの場面を見直してみることにしよう。

かわりとして

もし、この小さな場面を入園したばかりの園児とのかかりとしてとらえ直してみたらどうなるだろう。

ご本人の園児は、恐る恐るままごとコーナーに近づいている。のちになって慣れてしまえば、こんな「恐る恐る」はどこかにいってしまいうだろうが、それは未来の話だ。いまはもっぱら入園直後の不安が主人公だ。だから身も心も重いのである。

不慣れた環境を少しずつ解きほぐしてくれるのは既知のもの、周知のものが頼りになるわけである。「あ、ままごとの道具がある！」というのはその一例である。ただし、勝手に近づいてよいものか。このとき先生が「いいよ」と言ってくれた。そのことは、近づいていいという許可と同時に、許可してくれた「先生」とのかかわりが一歩ほぐれたことを示している。だから、次の「さわってもいいかな」という表情で先生の方を見ると、園

児は、肯定の答えを予想しているのである。

こんなわけで、この小さな場面は、皿やスプーンにさわって、並べ変えてみたり、ひとりごとを言ううちに——つまり物とのかかわりのうちに——環境を手慣れた形に組み替えているのである。物とのかかわりが、ほとんどの場合、人とのかかわりと同時に生まれているということをおこころ。

役割の出現

園児が自分の役割を演ずるのは右の二つの「かかわり」がゆるやかに成立し、そのあとである高まりを見せるときである。自分が組み替えた環境を「見てくれ」と訴える。だれかに「見てくれ、こんなにできたから」と呼びかける。そういう条件が昂まったときである。いずれも「アップビル」だが、これは例のお店屋さんごっこの際の「さあ、いらっしゃい」と構造的には同じである。見かけはともかく、この表現には「われここにあり」という存在の告示と「何を商っているか」という展

示的な表現とが含まれている。

「ねえ、先生、見てよ！」

と呼びかける子どもは、ここで自分の「手がけたこと」を背景に立っている。そして、そのことばによって、教師から「声をかけてもらう」ことを期待し、ついで「目をかけてもらう」ことを期待している。

かくて「手をかけ」にはじまり、「声をかけ」を呼び込み、最終的には「目をかけ」でもらう関係を期待している。以上の「手をかけ」以下の概念は、日常用語であるが、がっちりとした理論体系の礎石になりうるようである。

実存とか、存在とか、現存在とか、その他もろもろの術語も生き生きとした想像力で身辺にもってきてもみれば、右のような概念と重なってくる。

「ねえ、先生、こっちへ来て、見て！」という呼びかけに、先生が園児のところへ行き、まなざしを交わし、「ああ、よくできたねえ」と承認してやる。

右の小さな表現のなかにもテツガク的なガイネンが現

われている。

かりに、子どもがこしらえたものがいかに稚ないものであっても、だれもバカ正直に「何だこんなつまらないものをつくって」だの「わざわざ呼んだりして」などとは応じない。(もっとも、「いま忙しいのだ」とかいって応答が成立しないのが家庭というナマな実存の世界の特徴だが)。

家庭の内部と異なって、幼稚園内は、あくまでもプロの教師がちゃんと責任をもっている。「責任」の厚意が「応答」だというものもこの辺の機微を示してくれている。

バカ正直リアリズム

したがって、バカ正直リアリズムの特徴も見えてくる。それは相手の立場を無視するという一点に特徴がある。狭く、しかもできあがった見方を変えようとはしない。悲しい立場である。「お店屋さんごっこ」の授業を見ても感動しない。ただ苛々として見ている。

遊びができないのだ。あわれ。

家庭の中ではこの苛々が許されるから、この点についてもふれておこう。少し横道にそれるようだが、このところをさけて通つたらもつたいない。

家庭の中で、子どもが何かを並べていたとする。「ねえ、見てよ！」と当然呼ばれる。

そのとき無条件に「あ、よくできたねえ」と愛想よく応じられる——とは限らない。

幼稚園の先生の家庭であっても——つまり幼稚園で他人さまの子どもを前にしているときはプロ意識で醒めているからいつもにこにこして応じている先生であつても、こと自分の家庭においては、そういうプロ意識、原理原則が通用しないのをちゃんと知っておられる。

だから、わが子が「ねえ、こんなものをつくったからぜひ見てよ！」と訴えに来たとしますな。その場合、プロ面に切り替えたり、営業用の面に切り替えることは時と場合によってはムリなのでありますよ。

そこで——

「うるさいわねえ。見りゃわかるでしょ。いま台所の仕

事で忙しいのだから」

と、声高に、語尾を上げて、トゲのある、ケンの含んだことばで応じることもおあり（いや、大あり）のはず。あ、つ、れ。

これをケンカランと一方的に断罪すべきでしょうか。

否、です。ここでケンカランと言う人は、たぶん子どもを育てることの「のっぴきならぬ」ことを身をもってジッセンしたことの無い見物人である。それこそバカ正直リアリズムであるぞ。

かくて、「のっぴきならぬ」ことをしかと見すえていると、子どもへの対応が一樣ではありえないこと、一筋縄ではいけないことが見えてくる。幸いにも、家の中では、たまさかに怒鳴ろうが、コミュニケーションのネットワークは何通りもあるので、致命的にはならない。（ただし、幼児と親の場合）

生一本

バカ正直リアリズムなどという品のよくないことばは

あまり使いたくないが、それを別のことばに代えると、生一本主義とか単一的思考とかガンコとか、いろいろと言ひ換えねばならない。そう試みると、急に平べったい（それこそ「バカ正直な」ことになってしまう）ことになりかねない。愚か正直、愚直、等、いろいろ試みているうち、それが意外にも愛嬌のある意味をもっていることなどもわかってくる。

お芝居で「バカ正直者」の役割を演ずる人はバカ正直者では不可能だ。

子ども——四歳児ですよ——が入園して一ヵ月目、お店屋さんごっこを演じた。

粘土でだんごをつくる。トマトをつくる。きうりをつくる。

開店！

「いらっしやい」「ぎあ、いらっしやい」

粘土でつくったお金をもって買いに行く園児たちのことば——

「〇〇ください」が圧倒的。

そのなかで驚かされた発言左のごとし。

「おつかいものですから」

「おつみしますか」（しぐさがみごと）

「おつりはいりませんよ」（チップ？）

「見つくろて（見つくろっての意か）くださいな」

「ナダノキイッポン（灘の生一本）とどけてください」

ああ、「生一本」！。子どもは生一本に学んではない。「生一本」ということばを使えるほど、生一本ではないのである。

見立てる

「見つくろってください」には参った。こんなセリフをいったいどこで学んだのだろうか。

「見つくろう」とは「見はからう」こと。品物などを適当に選んで整えることだ。そのイミを四歳児はわかっている。だが使ってみせた。このズレは、具体的な場面ではしめられる。売手が「見つくろう」のイミを理解できなければどうにもならないからである。

「見つくろう」などという買い方は、元来は買い方が売る側にゲタをあずけることに近かった。買い手が「見つくろう」ことよりも、買い手が売る側を信用した上で生まれた表現だった。買い手が自分で見つくろって買うことは今日の方が主流である。主流になれば「見つくろって買う」という表現は少なくなるはずである。

園児たちがどのようなことを用いようが、そこで展開している交換は、一つの重要な要件からできあがっている。それが失われたら「バカ正直リアリズム」に戻ってしまうのだ。その条件とは「あるものを別のものに見立てること」にほかならぬ。この点が共有されているから、粘土のお金はお金として通用し、粘土の「おだんご」は「だんご」と見なされているのである。

当然のことと云うなかれ。

ゴザ一枚が「店」なのである。そして子どもである自分分は、「お客さん」に変身し、次の場面では「パン屋さん」に変身している。「パン屋さん」として、「お客さん」にパンを売っていたご当人が、次の瞬間には粘土のお金

をもち、「きょうはお休み」と書いた紙切れを「店」の前に立てて、すぐ横の文房具屋さんに買い物に出かけている。

どの「店」も、先生が客としてやってくることで活気を呈する。これは晴れの場。

サービス業

われわれオトナは、「お店屋さんごっこ」といえばほとんど品物を売っている店だけを想像する。

ところが、われわれの予想に反し、最近では園児たちの「お店屋さんごっこ」に「サービス業」も登場する。

これは冷静に考えれば予想されないことではなかった。「魚屋さん」や「パン屋さん」と並び「本屋さん」や「文房具屋さん」が登場したとき、これらの「店」の業種の違いに気づいておけば予想もできたのである。

唐突に開店したのが「歯医者さん」である。椅子をニコ向かい合わせに並べ、スプーンと茶わん、それにコップを用意し、それを「見たてれ」ば歯科医院が出現す

る。あ、隠れていた。ストローが三本。ビールのふたが二コ、それに色紙で切り抜いた治療薬。

数日前、歯の検診が行われたのである。

それをおぼえていて早速応用したのである。

「どれ、どれ、アーンして」

「大したことないです」

「おだいじにね」

「はい、つぎ〇〇さーん」

これも一日やそこいらでおぼえられるセリフではなさそうである。歯を痛くして、これまでに何回も歯科医に通ったのであろう。そうでなくては「おだいじにね」などというセリフが吐けるものではない。

とも思ったが、たしかめようがない。一方では、こんなセリフ四歳児が容易に自分でつくり出せるものもあるような気がする。テレビなどから学べるものなのだから。

「交歓」という観点から整理し直してみるとどうなるか。「魚屋さん」や「花屋さん」を演ずる子どもたちは、

「いらっしゃい」をあまり超えないでいる。ところが「サービス業」を演ずる段になると、この歯科医の場面でもそうだったが、語調、しぐさ、応答がいやにサービス的になるのである。お愛想を言い、愛嬌をよくし、お世辞も言うのである。

「痛くありませんからね」

「もうすぐですからね」

「じゃ、こんどは火曜日に来てください」

何というすばらしきドラマ。

後日談

さて読者よ！

これらには後日談がある。こんなことを演じていた園児たちも、とくにこれらを乗り超えてしまった。ご当人たちはこんな遊びをしたことなどをとくに忘れてしまっている。成長のある段階の一コマとしてこれは幼稚園の教師の記録とその分析のうちに残っている。のみならず、その分析の成果はしだいに積みあげられ、理論的

にも高いところに到達している。

理論——ああ、頭が痛い、とお思いにならないでいた
だきたい。理論は本来、私たちの日常の実践を見通せる
力を与えてくれ、私たちを身軽にしてくれるものである
はず。たあいもなれないと思われるようなことの中にも、発
展のきっかけをつかめるようなエネルギーの調整をして
くれるものであったはず。

一九八五年の十一月七日のことだった。三重県の津市
にある市立藤水幼稚園で公開の研究発表会があった。全
国から多くの人びとが集まってきた。

その当日、研究発表のまとめと、資料をいただき、本
当に感銘を受けた。あれからもうかなりの時間がたって
いる。

しかし、時折この研究集録を取り出して読み直してみ
る。

その特徴は左のようなどころにある。

- 一、研究のねらいが明快に示されている。
- 二、園児の実態を継続して追っている。

三、どういう場面で、どういう関わりにおいて、どう
発言したかを記録している。

『ごっこ姿を追って』と題する資料篇は何度読んでも
新鮮である。

今回の「お店屋さんごっこ」は、この資料篇を読んで
いるうちに生まれたアイデアである。

小学校の「お店屋さんごっこ」は古くからあった。筆
者も小学校二年のとき、算数の授業のなかでそれをやっ
た記憶がある。「ええ、いらっしやい」というような呼
び声のネタを手に入れたのは落語からであった。最初口
にするときは、遊びとはいえ勇気が必要だった。しか
し、一回口になると、あとは簡単だった。

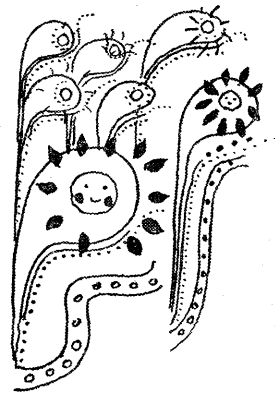
そういえば、理論だって、SFだって、「ごっこ」の
要素をもっているようだ。

(名古屋大学)

自然とのふれあい (その2)

——草餅つき——

斉藤 芳子



私どもの幼稚園は、幸に、自然に恵まれていた。そこで、積極的に、自然とふれ合う保育を考えてきた。以下に、その例をいくつかあげてみよう。

入園当初は、新しいお友達と早く楽しい幼稚園生活が自発的に出来るように、戸外で遊ばせることを主眼とした。寒い冬ごもりの冬が終って、草木も芽ぐみ、人の心も浮きたつ春である。

四季のはっきりしている日本では、その変化をてがかりに、自然を教材として、いろいろな事に気づかせ、観

察眼を養い、情操を育てることが可能である。

子どもたちも、四月、五月は花壇の水仙やチューリップに皆で小さなじょうろで水をやりながら、

さいた、さいた、チューリップの花が

並んだ、並んだ、赤、白、黄色

どの花見てもきれいだな。と、大きな声で歌っている。勿論、花も赤、白、黄色と植えておく。音楽の教材にもなるから……

園庭の隅の草はらや、野外を散歩すると、黄色いタンポポやナズナ、ヒメオドリコ草、オオイヌフグリなどの

小さな白や紫の花などが子どもらを迎えてくれる。

テラスに小さなジャムの空瓶やヨーグルトの空瓶に草花の名のラベルを貼って、机の上に並べ、皆で分類してミニ生花展が開催される。それを観察コーナーとして常設すると、何時も季節の花や実が置かれるようになる。

野の花の名前に興味が出来たころ、ヨモギもいっしょに摘んで名前を教える。花のない草にも名前のあることを知って、草に対しても関心がめばえてくる。

そこで、幼稚園では、毎年五月五日の「こどもの日」の祝日を、「端午の節句」の日でもあるから、お父さまの保育参観日としてお招きすることになっている。

ねらいは集団生活の中の幼児を自己評価して理解していただくこと。又、父と子がふれあい、遊ぶ日として、ゆっくり話合いやボール投げをしてすごしてもらう。

園庭に高く鯉のぼりをあげて、

屋根より高い鯉のぼり

大きいま鯉はお父さま 小さいひ鯉は子どもたち

おもしろそうに泳いでる

と、子どもと一緒に青空を見上げて、声いっぱいにうたひ、その後で四月中に園児達と摘んだ「ヨモギ」で草餅をついていただく。

次に抜粋するのは、草餅つきへのプロセスをつづった保育日誌である。

・四月一四日

「ヨモギ」の草を正しく観察するために、皆でシャベルで根から掘り起す。根が深くて力いっぱいかけ声をかけながらやっと掘った。

「わあ、ずいぶん長い根だ」

「ごぼうみたい」との声が聞こえる。

深い空瓶に根つきのまま差して水を入れ、机の側に並べている。ついでに先日の瓶の水の取替えもする。

・四月一六日

今日もしゃがんで、草つみをしている子がいる。「よもぎと似た草」を摘んで、「ヨモギ」と比較して見せた。

T 「白っぽい葉の方がヨモギだよ」

C 「葉の裏が白いね」

O 「葉のギザギザも少し違うよ」などの対話があった。

また「ヨモギ」に匂いのあることを知り、「いい香りがするよ」と皆の鼻先へ持ってくる子もいた。

・家庭へのおたより(同日)

若草の「ヨモギ」が芽をだしました。今年も親子で園の遊びに「ヨモギ摘み」をして、五月五日のこどもの日「端午の節句」の草餅つきをしたいと思います。

ヨモギに似た草もありますので、お母さんも勉強して下さい。子どもに教えてあげて下さい。

(参考)

・ヨモギは菊科の多年性の植物。長さ七〇センチ位に伸びる。葉は互生し、菊の葉のように深く裂けている。早春に新しい葉を摘んで「草餅」に入れるので「モチクサ」ともいわれる。葉草で、おきゅうのもぐさは、葉裏の綿毛をとったものである。汁の実、よもぎ飯、よもぎ茶にもする。

・四月一八日―家族でヨモギ摘み―

前もって話してあったので、登園した親子からすぐ摘み草の作業に入る。

○お母さんに負けないでビニール袋や自分の帽子に摘んだヨモギを入れる子

○「こんなにとったよ」と嬉しげに教師の所に見せに来る子

○お母さんと摘んだヨモギを、ダンボール箱に集めて入れる子

お母さんの来ない子は、グループをつくって先生に教えられながら摘んでいた。四〇分位でダンボール四個位に集った。園庭にゴザを敷いてお母さん方で仕事を分担して「ヨモギ」処理をする。

○混じった雑草や固い茎を取り除く人

○ヨモギをきれいに洗う人

○大きな鍋にお湯を煮たててゆでる人

○ゆであがったヨモギをまな板に並べて、トントンと包

丁で小さく刻む人

○刻んだヨモギをおにぎりにして、水を切りサラシラッ
プにつつま人

あつという間に五〇個程のヨモギのおにぎりが出来
て、冷蔵庫のフリーザーに保管する。

・五月四日

PTA役員、教師方で明日の草餅つきの打合せをする。
昔のままの手づくりですので、昨年の記録を確認
しながら、手順、やり方などを理解する。

餅米をといでおく。ヨモギのおにぎりをフリーザーか
ら出してとかしておく。臼、杵、あやとりのバケツ、せ
いろ、薪木、かまどなどを年長、年少の保育室前の園庭
にセットしておく。テラスに机を並べて大きいビニール
を張り、草餅の丸め台にする。明日の天気祈りつつ帰
る。

・五月五日―子どもの日、父親参観日、端午の節句、草

餅つき大会の日

早番の先生とPTA役員で釜の湯を沸かす。薪木がか
まどの口に赤々と燃えて、大きなせいろから、白い湯気
があがっている。

次々登園する子が、めずらしそうにかまどの火を見て
木片を探してきてくべたりする。「せいろ」の湯気を見
て「これ何しているの」と不思議そうに見ている。

杵をもって餅をつくのはお父さんの役。一臼三升あて
で四臼つので、お父さんに交替でついてもらう。初体
験のお父さん、お母さんが大多数。

お父さんの杵がベッタコと餅をつくと、園児が一斉
に「よいしょ」と元気なかけ声をかけ、その間にお母さ
んのあやとりの水がピタピタになって、餅つきのリズム
も呼吸もびったりで最高に盛上ってくる。

半分程つけた白い餅の中へ「みどりのヨモギ」を入れ
てまた掛声高くつきはじめ。みるみる白い餅が草色の
餅にかわっていくと、「わあ、色を入れなくても草色の餅
になるんだね」と子ども達はびっくりしている。お母さ

ん達も「草餅は色を入れていると思っていたのに、自然で色が出るんですね」と感心している。これこそ本当の健康食。

出来あがった草餅を、片栗粉をいっぱいまいてある台の上に移して丸める。湯気のがあったやわらかい草餅を応援のお母さん方が次々丸めて黄な粉にまぶし、お皿に二個盛ってはお砂糖をかけ、集ってくる子ども達に渡している。

園庭の思いおもいの場所に、お父さんと子どもでくつろいで楽しそうに食べている。

以上、わが園の一端を紹介したが、町の中の幼稚園では園庭も狭く、草が足りないから、園外散歩でヨモギ摘みをしたり、「ヨモギ」は家庭の小さな庭の隅や近所の空地、道路の道端などどこにでもある野草なので、一にぎり位づつ持ち寄るのもよい。当日になると結構集って、みどりの濃い草餅が誕生するものだ。

「ヨモギ」が集まりすぎたら、冷凍のまま保存して、お正月頃の草餅は珍しくいただける。

餅つき行事は、一般に秋の米の収穫の時や、お正月の頃学校や幼稚園で行事として行われるようだが、私達は十年程前から、新入園児や新しいPTAの会員のふれあいのため、五月に行っている。春先の野外で心いっぱい開放感を味わい、約一ヶ月近く、自然の中で遊びながら、花壇から野原へと多くのことに気づき学び、人と花と草と仲よしになるというプロセスを経て……。

「白いごはんがヨモギで草色の餅になる」までの経験と観察は「草餅つき」ならではの強い感動と満足感を与えてくれる。春の野の草つまからはじめて、遊びながら親子で手づくりの草餅を食べる喜びは、最高のように思う。

親同志、子ども同志の生き生きとした話合い、笑い声、花と共に歌い、鯉のぼりと共におどり……。

秋の実りの時には、ヨモギの実りととのび切った背丈を観察するのも楽しい。

(宮城県聖光幼稚園)

子どもの遊び（その7）

E・A・A・フェルメール

浜口順子訳

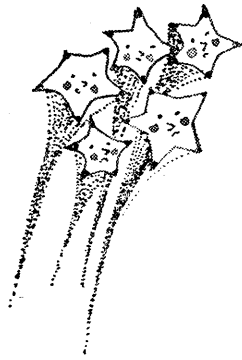
第四章 イリュージョンの世界

（一）イリュージョン的遊び

イリュージョン的な

遊びを観察しようとし

ても、子供の遊びがくりひろげられている公の場でそれを見つげ出そうとするのは、それほど容易なことではない。すでに、子供の人格的発達にとってイリュージョン



的遊びが重要である点には留意してきた以上、それが実際には稀にしか観察されないと残念な思いや不安な気持ちにもなるだろう^①。

この場合、子供の遊びを發展させることができるように大人側が用意する「自由」という観点から考察せざるを得まい。あるいはまだそれでは不十分であろうか。

まず立ててみるべき問いは、イリュージョン的遊びとしてわれわれが実際に見ようとしているものが何なのか、ということについてである。イリュージョン的遊びは明確なゲシュタルト（外的に現れたイメージ像）をもっており、それは子供自身に意識されている。またそれは、言葉による応答という出来事すら内包した空間的世界である。イメージ化という明晰性を有するにもかかわらず、イリュージョン的な遊びは、その場に居合わせている観察者の目に直接的に見えてくるものではない。イリュージョン的遊びは、たとえばボール遊びのように、豊かな運動性をもって現れてくるのではない。それは子供の内面と外側とにあるイメージの世界が、ただ部分的に実現されたか具体化されたものなのである。粗雑ともいえるぎこちない行動で、子供はイメージ的空間の『扉』を開いてみせる。たとえば「ここがお家だよ」と言うことによって、言葉がシンボル（象徴）的な行動を補完して、世界を喚起していくのだ。遊び場のわきを通り過ぎながら子供の遊びを眺めていても、子供たちが

そこである世界を創造しており、しかもその大部分は、われわれの具体的な現実性に据えられた眼差しの下では見えないままになっていることを多分見過ごしてしまうだろう。遊び場のすみっこ、あるいはベンチの上などにいる子供は、遊びつつ何かを得ている。つまり遊び仲間と一緒にいる場合でも、彼のイリュージョンの世界に住まう者たちの中で、自分固有の部分を獲得するので。

イリュージョン的遊びにおいて、子供はモノがすでに担っている意味に他の意味を付け加え、二重の意味をもつ世界と共に遊ぶ。世界が子供の前では『のような』という意味を得るのだ。現実性と共存するこの『のような』というアナロジーは、論理的なものではなく、情感的に体験されるある同等性である。少年が学校へと自転車をこぎながら、ツールロードウリフランス大会レースにおいて先頭を競って疾走している偉大なるレーサーの姿に自分を見立てて空想を広げることがあろう。彼はその時、登校途中で自転車に乗っている自分を忘れていたわけではなく、現実を重層的に解釈して、『のような』

というイリュージョンの方へと価値を傾斜させているのだ。こうした重なり合った解釈を可能にするには、現実―学校まで自転車をこいでいくこと―と自己とを共存させなければならぬ。トゥール・ドゥ・フランスという目標が、現実の大会と一致する必要はない。少年は好きなきにその『疾走』を体験しなおせるし、何度でもいろいろなトップ選手たちを勝ち抜くこともできる。現実の上では少年と関わりのない選手たちは、無論、少年のこんな個人的世界における自分たちの役割や、はたまた少年の静かなる勝利の栄冠などを知るべくもないわけだが、少年はそういう選手たちに対して勝ち名乗りをあげるので。イリュージョンの遊びは子供にとっては明確なゲシュタルトをもつが、それは子供が意識的に創り出したものだ。そしてその際子供は、自分がその遊びに感情的に巻きこまれた状態にあることを認識してはいるが、これはもとより反省的な知というものではない。

これまで述べてきた遊びの諸位相の中には、意識レベル上の違いがすでに見てとれる。つまり遊び的循環性運

動と感覚受感的遊びは、遊び的な秩序づけ行為やルールの遊びに比べて、遊びのゲシュタルトが、対象物を扱うプロセスでより暗示されているのだ。後者（秩序・ルールに特色がある遊び）が子供の発達後期に現れてくるのに対して、イリュージョンの遊びの特徴は、きわめて幼ない頃からこうした『のような』的世界を呼び起こす点にある。形態付与やルールを伴う遊びが優勢になるずっと以前から、子供は固有の世界創造という偉大なる発見のきざしを呈する。自分固有の世界における人格的（私的）な意味は、子供が他の人たちと共有している公共的現実性に目を向けるようになるやいなや出現する^②。しかしそれ以前に子供は意味付与そのものを発見しており、つまり抽象的な行動およびそこに現れている意味を知ると同時に、シンボリックな所作を通して自分の印象の意味をも認知するという、人間性の自由をも見出すのである。このような発達について見ていこう。

(二) 人格的発達におけるイリュージョン的遊びの 発展

一才半位になると子供はもう『のような』的世界を自分の行為について喚起することができるようになる。たとえば眠ったふりや食べるまねをする事などがそうだが、これらの所作には、精密さに欠け粗雑であるという特徴がある。したがってこれはシンボルの意味をもつ行動である^④。この時期、子供は言葉とシンボルの行為とを同時に活用する。その際子供は『ここに今ある』具体的な状況を越えて、何か別の意味へと促されており、同様にして子供は『ここに今ある』モノを別の世界―『のよるな』の世界―へと置き換えることもする。こうした意味の置き換えができるためには、直接的で具体的な行為を解消し、言葉や行動のシンボル性(象徴性)を把握すると共に、自ら意味付与を行わなければならない。親は言葉をコミュニケーションの道具として使いたいが、言葉という媒介によって、直接的でない行為が可能

であることを子供に示している。たとえば親が椅子というものについて語るにしても、結局言葉という媒介物を介して間接的に椅子を扱っているということだ。その際親と子供はまさに共同的な現実の中にある。しかしながら子供の目には自動車としてイメージされるようななかを契機に、椅子を自動車に見立ててしまうような場合、子供は言葉や行動という媒介によって『のような』という世界を創り上げることができるのだということを発見するに至る。

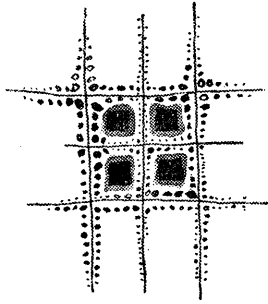
言語によって子供は―行動によっても同様だが―イリュージョンの世界にゲシュタルトを与える。言葉は、ちようど行動がまた自我の表現であるように、表現手段である。表現的な行動とは常に自我が『行為しだす』(acting-out)ものであるが、そこでの意味付与はまた他者との共有的世界に投射される。子供は自分の意味付与が他者に理解されるという経験をよくしている。魔法で小犬に変えられたソファのクッションをやさしくなでている時などは、そんな経験の一コマであろう。母親と遊

びながら、子供は『小犬』とクッションとを結ぶ感情的なアナロジーが、母親という他者によっても同じように体験されているのだと感ずる経験をする。そして子供は『のような』という世界の中で、自分自身をその世界の創造者として意味づけている自我をも経験する。この自我経験はさしあたり、自己意識に欠けた自我所有以上のものではない。しかし次のような場合、子供は自分の創造的行為についてさらに何かを自覚するようになる。たとえばテレビのスイッチボタンを、イリュージョン（空想）上の自動車のダッシュボードに仕立てていじくりまわしてみたいのに、それが大人によって許可されない場合だ。母親にテレビにさわることを禁止されてしまうこともあろう。テレビは、公共的な現実の中でもつテレビとしての意味を保持し続けなければならないのだ。「さわってはいけない」という警告は、子供にとって理解不能なことではない。なぜなら子供は遊びながらも、そこで自分だけの意味付与を行なっていることを忘れてはいないからである。

「私は自分が遊んでいることを知っている」ということが遊びを導くのであるが、この意識は反省的レベルのものではない。子供はイリュージョンが日常的な現実と交錯してはならないことを心得ている一方、自分の自我の世界に他者が介入してくることは激しく抵抗する。いかに幼くても子供は、イリュージョン的遊びを、眼前に出現している自由として発見しているからだ。この発見は決して些細な出来事ではない。

子供がイメージ化に伴なう直観的なエネルギーに引きずられてしまわない限り、遊びと現実との区別は、子供自身の統制下にある。年少の子供にとって年上の遊び相手というのはいつも、不安をひきおこす脅威的存在としての役を象徴的に演じているものだが、こういう年上の子供と一緒に遊ぶ場合などは特に、イメージ化が情動性によって肥大してしまい、子供の統制能力を越えて一人歩きをはじめてしまうことをわれわれは知っている。

『怒ったオオカミ』のこは、学童期には楽しく遊ぶこ



とができるようになるが、幼児にはまだ遊びこなすことができずに、不安ばかりを惹き起こさせてしまう。

単純でそれほど情動を刺激しない遊びにおいては、幼児も、イリュージョンの『のような』性とそれに誘発される恐怖とを区別できる。(本物のお菓子のように)色をぬられたボール紙を、本物のお菓子だと言って見せても、三才児ですでに抵抗を示すことができるという点を明らかにした研究がある。大多数の子供がそのごまかしを即座に発見し、中にはそれをお菓子『のように』見立てて遊び始める子供もいたという。一方、他のグループの子供たちに対して、お菓子ごっこで遊ぼうという提案の下に同じボール紙を与えた際には、すべての子供たちがちゅうちゅ、よ、することなくこれに同意したともいう。^⑤ ch・ビュラーは自分の満二歳の子供がすでに、いかに意識的にイリュージョンを操作しているかについて実例を示している。(砂を固めてできた)ケーキを母親に向かって一緒に食べようと誘いかける。それでいてその子

供は、そのケーキが本当は砂でできているのだという事実を指摘することによって、そのイリュージョンを自ら取消しもする。もし母親がこの意味の変化に注意を払わないまま、それを『のような』のケーキとして扱い続けてしまうと、子供はこう言って制するだろう。「だめ、食べたらだめ。だって砂だもの。」

年少の子供はイリュージョンの世界を、自分の好きなように変えられると直観している。すでに三、四歳頃になると、なすがままに意味付与を行なう自由を見出し、いるのだが、その自由をまだ大きく見積りすぎていて、遊びの喚起される場である公共的な現実との結びつきはほとんど気づいていない。自我を他者に対してはつきりと際立たせようとするかたくなさが顕著になってくる。幼児期に、子供は自我体験を遊びの中にも多く投映させる。イリュージョンの世界から踏み出している場合でも、空想上の遊び友達が、自分を導いていく他我（もうひとつの自我）として喚起されるということがある。し

たがってこれは日常的な現実の中でも同時進行することなのだ。親の方もまだこの頃は、子供がわけのわからない仕方*で*イリュージョンと日常の世界とを織り合わせていても、当面は寛大かつ許容的態度でいられるのである。

五、六歳になると、イリュージョンの世界がはっきりと人格的（私的）な特徴を帯びてくる。はからずも遊んでいる姿を誰かに見られてしまった子供が、捕えられてしまったような窮屈な感じを抱く場合などがそうだ。子供のイリュージョンの世界に登場する人間たちの担う役割には、子供なりの感情が普通以上に付帯されるようになるし、また、遊びが禁止される事態を予測できるようにもなる。さらには遊びが現実の世界において許されることなのか、許されないことなのかに注意を払うことが可能にもなる。

子供は成長するにつれて、関係性の意識を発達させるが、関係性における対話（ダイアログ）を通じて自らの個性にも気づくようになる。イリュージョンの世界

を、個人的な特有の領域として経験するのだ。小学生の年齢になれば、イリュージョンを秘密の領域として他者の目にふれないように押し隠そうとする。それを同時に貯えておけるイリュージョンをさらに創り出そうとするし、またそれができるようにもなるのだ。イリュージョンの遊びというものをここでは、内的世界を行為として表出すること(acting-out)として理解しているが、これはたしかに外的世界の何かとダイアログしながら喚起されるのであって、他者と共有している世界に織り込まれながら出来上がっていくものではない。^⑦

学童期になると、共有的現実が強調する秩序や具体的な諸意味にうまく適合できることがまず期待される。しかし親は、子供が形成していかねばならぬ実際のな意味だけではなく、遊びを通してイリュージョンにゲシュタルトを与える自由をも与えられる者なのだ。そのうえ親は、遊具を与えることによって、イメージ化に影響を及ぼし、遊びに刺激を加えさせる。

ここからわれわれの関心は遊具の刺激的意味へ向かっていく。遊具という公共的な意味を担ったものによって、子供は同時に、ある私的世界を創り上げられるのだろうか。遊具から示唆を受けてゲシュタルトを与える際、子供はいかに創造性を駆使して人格性を帯びたイリュージョンに関与するだろうか。

《原註・参考文献(抄)》

①前章の終わりにイリュージョンの遊びの人格的(私的)意味に言及した。ここでランゲフェルトの行なった「公共の意味付与」と「人格的(私的)意味付与」との区別が問題になる。世界を自分の目で見つめ、世界との親密なダイアログ(二極を内在した統一性)の下で(厳密に個人的なものであることを認識しつつ)意味付与を行なう自由を発見することによって、イリュージョンの遊びにおける私的な意味付与が可能になる。つまり私的(人格的)意味付与は、自我、および世界というベースベクトイブの中の固有な態度とも関連しているのであ

る。

やはりランゲフェルトが提出した概念である『隠れた場所』についてもここで言及しておきたい。子供は私的な世界を、公共的世界のもつ共同性から外れた場所での自らの前に招喚する。参照、「隠れた場所」(De 'verborgen plaats' in het leven van het kind) Utrecht, 1952.

②年少の子供は日常的現実性のある公共的な世界としても見做している。成長し、感覚と身体との親近性から距離をおけるようになるにつれて、安定した具体的な視点を確立していく。その結果日常的な現実性に、いわゆる客観的な側面が増大する。そうして私的な情緒的印象の方は子供自身から分離されるようになる。

③ J. Chateau によると子供は一歳になると仮構的状况、いわゆる「じっこ」的状况を喚起する行動を示すという。ここにはすでに創作する熱意が見られ、これによって人間の子供は抽象的・象徴的所作ができるようになる。(L'enfant et ses conquêtes, Paris 1960)

④一歳半の子供は言葉の象徴的機能を発見する。モノに

ついて話すときに、もはや実物を具体的に示す必要はなくなる。ランゲフェルト 'Ontwikkelingspsychologie' Groningen 1957 『発達心理学』

⑤ D. P. Ausubel, 'Theory and problems of child development, N. Y. 1958

⑥ Ch. Bühler, 'Kindheit und Jugend, Leipzig, 1931

⑦原註①参照。幼児は『隠された場所』をまだ公共の世界から閉ざしてはいないが、学童期になると秘密が意味をもつようになる。(じっこ)

(お茶の水女子大学大学院)

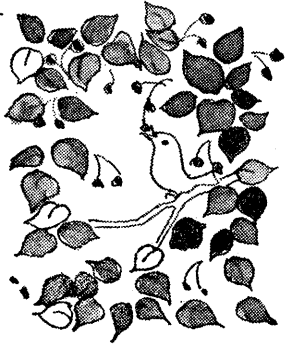
『子どもへの愛』の社会学(3)

近代社会と子ども

山田昌弘

前回、近代化と共に「子供への愛」の強制が規範化され、その強制が、子ども、親、教師にとって情緒的に負担となっている(少なくとも前近代社会に比べて)事を述べた。子育て、教育の場において、「自然」に愛情を感じられる場合はよい。しかし、愛情の歯車が狂うとき(狂うのが普通なのだが)、愛情の強制の規則は、重荷となって人々を苦しめる。

今回は、子供への愛情の強制が生じなければならない



理由を、近代化論との関連で考察していく。

7 近代化と子育て

「近代化と子育て」という組合せから、何がイメージされるだろうか。子どもが大事に育てられ死亡率が下がれる、公教育が普及する、子どもの人格への配慮、等々。これらの特徴は、表面的なものだ。近代化と子育ては、もっと深いところにつながっている。

西ヨーロッパをモデルにとると、二つの大きな変化を経て、近代社会が形成されてくる。一つは、ルネサンスから新大陸発見の頃、世界市場の成立という変化が生じた。前近代社会では、普通、自分達のためだけに生産し、余剰を市場に回していた。しかし、大規模な市場が成立すると、初めから市場に商品として売るためにもものを作ることが普及してくる。この時期は、前回述べた、家族の中に子どもへのかわいがりの感覚が生じ、モラリストの間で子どもへの厳格な躰が言われ出した時期と一致する。もう一つは、産業革命期に生じた変化である。

商品生産が工場で行われるようになり、人々は工場で働きその見返りとして賃金を得る。いわゆる、労働力の商品化が普及していく時期である。

以上の変化は、単に技術や経済的な側面に限られたものではない。人々の心理的な側面に大きな変化が生じている。それは、人々が何かする時に働く動機づけの問題である。前近代社会では、原則として動機づけの問題を考える必要がない。というのは、社会の変化がない、もしくは非常にゆっくりしているため、人々は昨日や去年と同じように行動していればよい。自分たちのためだけに必要な事が必要だけ行うため、自分の行動の意味を考える必要がない。

一方、近代社会は動機づけが問題にされる社会と言ってもよい。何かを行う場合、その動機、理由が問題にされる。自分の行動や、他人の行動を、表面的な結果だけでなく、内面的な動機を読み取って理解しようとする（ダニエル・ベル『資本主義における文化的矛盾』参照）。子育てという活動も、例外ではない。近代以前の社会

では、親たちが子どもを育てる、親類や近所の人が子どもを面倒をみるという事は、あたりまえの事で、とりたてて理由を考える必要のないことだった。母乳を与えるのが、母であっても親戚のおばさんであっても、乳母であっても、その意味の違いをとりたてて考える事はなかった。しかし、近代社会では、子どもを育てることに

も、納得できる理由が必要になる。表面的には同じ行動でも、読み取られる動機により、質的に非常に異なったものとして解釈される。例えば、母親が子の面倒をみる、雇われたベビーシッターがみる、親戚がみる、これらの例は、表面的な行動をみればほとんど同じことをしている、人々が受け取る意味には大きな差がある。親が育てていけば、愛情から育てていると意味付与されるだろうし、ベビーシッターはお金を貰えるから世話していると思なされる。

8 シャドウ・ワークとしての子育て

近代社会は、市場社会として特徴づけられる事を述べ

た。市場は交換の世界である。商品を作り、売り、必要な物を買う。労働力を売り、賃金を得る。そこでは、人は計算的な動機に基づいて行動する。人は、自分の商品や労働力、サービスをより高く売ろうとし、相手の商品やサービスをより安く買おうとする。

このような市場世界の中では、子育てという活動の位置づけに困ってしまう。子を育てる事は、母乳を与える、世話をする、教育費を出す、小遣いを与える事などを含めて、子どもに対する一方的な贈与である。いくら子どもにサービスや資金を投入しても、支払い能力のない子どもから、見返りを期待することはできない。

『脱学校の社会』で有名なI・イリイチは、近代社会において対価が支払われない労働を、「シャドウ・ワーク」と名付けた。親が行う子育て活動は、「通勤や受験勉強と同じくシャドウ・ワークの典型である。例えば、ベビーシッターが子どもの世話をすると賃金が支払われるが、親が同じことをしてもお金は支払われない。

では、計算的動機づけによって特徴づけられる近代社

会において、シャドウ・ワークは、どうして行われるのだろうか。通勤や受験勉強のようなシャドウ・ワークは、賃金を得るために仕方ないとか、将来への投資といったように打算的な動機によって解釈することができる。イリイチのいう、近代社会で生活するための強制労働ということができる。

しかし、子育て活動は、通勤や受験勉強のようなシャドウ・ワークとは、少々色合いが違う。というのは、親にとって、子を育てる事は、生活する為の必要な労働ではないからだ。もし、子育てを打算的動機によって解釈するなら、子育てが損だと思ったら、子育てをやめる選択も出来るはずだ。イリイチは、この点に関してはっきり述べていない。

ここに、「子どもへの愛」という動機づけが登場してくる理由がある。自分の子どもを育てるといふ活動は、親の意識の中で、市場における活動とは異なった意味をもつものとして受け取られる。家族を離れての物やサービスののやり取りは、打算的な観点から行われる。家族内

の子育ては、情緒的な観点から行われる。つまり、子育てが情緒的に行われるべきだ（子どもに愛を感じるべきだ）というイデオロギーが、親の子に対する無償労働を支えている。近代社会は、子どもへの愛の強制なくしては、人の再生産という社会の存続に不可欠な活動を確保できない。

9 現代社会と子どもへの愛の変貌

先進資本主義国では、一九六〇年代末から、家族の領域に大きな変化が生じつつある。女性の職場進出、離婚の増大、同棲、未婚の母の増加など、統計的に目に見えるものだけでも大きく変わっている。アメリカでは、特に、離婚や再婚が多く、スウェーデンでは同棲や未婚の母が多い。

子どもを巡る環境も、変化を被らざるをえない。先に述べてきた通り、近代社会では、父母が自分の子どもを排他的に育てることが、規範化されている。そして、父親が市場で働き賃金を得、母親が子どもに対してサービ

スを供給するという性別分業が一般的であった。そして、その活動は、「親は子どもに愛を感じるべき」というイデオロギーに支えられている。現代社会で生じつつある家族の変化は、この前提を覆す可能性を持っている。

アメリカでは、離婚や再婚を繰り返すというパターンが増大している。一九八〇年には、二四一万組の結婚が行われた反面、一一八万組の離婚が生じている。離婚、再婚の結果として、多くの片親家庭やステップ・ファミリーと呼ばれる継子や継親と一緒に暮らす家庭が増大した。すると、子どもをめぐる情緒関係が複雑化する。別居しているが面会権を持つ親、同居している継親、継兄弟など、近代社会の情緒パターンでは処理できない新たな子どもとの関係が出現する。スウェーデンで増大している未婚の母も、父親の情緒的関与の欠如、そして、公機関や母方親族のネットワークの関与など、子どもにとっての新たな情緒関係のパターンを生じさせている。このような傾向は、子どもをめぐる情緒関与のパター

ンを多様化させる。近代的パターンからはずれた状況を、病理とか家族の崩壊と捉える識者もいる。子どもに情緒的に関わる人々が増大し、子育てが多様ネットワークに支えられる方向に変化するなら、むしろ好ましい傾向ではないだろうか。「子どもを愛さなければならぬ」というイデオロギーにとらわれる事なく、自然に感情をやり取りできる環境の出現を望みたい。

(東京学芸大学)

(二完)

蕪木 寿江

一月二十一日

ダンボール箱を押して遊んでいても他の友達がいると、「どいてください。危ないですよ」と断って走るなど今まで考えられないことだ。外のお店やさんでは、「二万円以上お買い上げの方には手作りケーキを進呈いたします」などと呼びかけをしていた。朝はジュースを飲んできたと話し、「先生も飲みたいでしょう」と言う。「ありがとう」というとにっこり笑う。リズム劇「空の色はなぜ青い」の配役一覧表を紙に書いて貼っておくと自分の名前の下に、「ともゆき」と書き、ともゆ



痛い痛いのとんでいけ その七

——就学ということ——

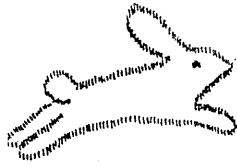
きの名前のところを消して「みのる」と書く。「K夫ちゃんが子どもがやりたい、といったから書いたのよ」と言うのと、「ともゆきちゃんと一緒に大人（役柄）になりたいから」と言う。「わかったわ」と言うと何度も、「ともゆきちゃんと一緒にやりたいから」と繰返した。お弁当の時カレーカールが床に落ちたのでしようへいちゃんが拾ってあげると、「ありがとう」と言った。「K夫ちゃん、ありがとうがすぐ言えて偉いのね」と言うると他の友達も嬉しそうにK夫をふりむいた。

一月二十二日

「クロスワードをやってみてください」と言
って縦横に枠を引いて友達の名前を「この中
に書いて下さい」と言う。書いてあげるとし
ばらくそれで遊ぶ。お弁当の時ヤクルトをと
もゆきちゃんにあげる。「ありがとう」と言
われると首をすくめる。(暗黙の諒承でK夫
だけは好きなものをお弁当に持ってきてい
る)

一月二十三日

友達の名前を道具箱を見ながら紙に書いて
友達を椅子に座らせて男の子は○○くん、女
の子は○○ちゃんと一人ずつ呼んだ。みんな
「ハイ」と手をあげて返事をする。「今日、お
弁当持ってきた人」と聞いても水曜日でお弁
当がない日なので誰も手をあげない。続いて
「明日お弁当持ってくる人」と言うと「ハイ」



とみんなが手をあげるのを待っていた。クロ
スワードはお母さんが大好きでよくやってい
ると聞いた。靴箱に自分で上履き、下靴を入
れるようになった。

一月二十四日

昨日書いた友達の名前の紙のことを「重要
書類はどこですか?」と聞いて、それを今度
はバス毎に書き直す。お誕生会が始まるとは
しゃいで舞台上る友達のことを一人ずつぶ
ったりしていたが、そのうちに落ちついて座
っていた。お弁当の時バターロールを持って
きたのをともゆきちゃんにあげた。友達にあ
げるのが面白くてたまらなくなったようであ
る。午後からリズム劇の練習をすると、「どう
して自分で言いたくないことを言わなきゃい
けないの?」と聞く。全くこちらが教えられ
る。ごっこ遊びの劇を通して子どもから出る

言葉を待つべきだったのだろう。

まさちゃんが昨日サイクリング道路でK夫ちゃんに逢ったらK夫の方から、「さようなら」と言った話をしてくれる。

一月二十五日

ひらがな積木の中から「よ・し・だ・と・も・ゆ・き」と取って箱の中に入れて引っぱって歩き、「この中に何が入っているか？」と言って友達にあてさせていた。友達がわからないでいると、「大事なもの」と言った。十時半にお弁当にしようと言ったが、「もう少し待てる？」と言うとそのまま忘れて高鬼をして遊んだ。先生方が、「K夫ちゃん、どこにいるかわからないわね」と喜んで話していた。みんなと同じような遊び方をしていた。お弁当の時、例の重要書類を持ってバス毎に名前を呼んだ。今日は名前を呼ぶたびに相手の顔



をよく見ていた。ちづちゃんが「ハイ」と手をあげると、「よいお返事ですな」と言った。

一月二十六日

ひらがな積木から、しょうへい、ちづ、の名前を探して箱の中に入れて押して歩く。じゅんちゃんの名前も覚えた。まさしちゃんの名前はまだ覚えられず、「なんて名前だっけ」と聞く。友達がサッカーボールを蹴っているとその仲間に入る。走るのがとても早くなり、足どりがしっかりしてきた。お帰りの時に又、K夫が出席を取る。友達が大きな声で手をあげる。隣の部屋から節分の歌が聞こえてくると、「鬼のうた、歌ってますね」と言った。みどり組も歌うと元気な声をだした。開心のないものは見えなかったり、聞こえなかったりしたが、興味の範囲も広がった。S先生がくると、「何ていう名前ですか？」と聞

いた。

一月二十八日

「昨日、おばあちゃんの家へ行ったよ」と部屋へ入ってくるとすぐ告げた。年賀状のお年玉プレゼントがあたってなかったの、おばあちゃんの家のはどうかしら？と見に行ったのだそうだ。豆まきの栞をつくっていると、「僕もつくろよ」と言っていて一緒に厚紙で折った。帰ってから、バスで三つ目の隣の小学校に面接に行った。(学区の学校は断わられたので)二時間待たされたがお母さんを困らせなかったと電話があった。十一月の中旬からもう就学の為の身体検査や知能テストが行なわれていた。

一月二十九日

六年生に連れられて五人ずつ検査を受け



る。K夫も難なくすませたが、多分就学猶予していることだろう、校長室に呼ばれた。丁度先客が帰られたあとでお茶とお菓子が出されてかたづけられてなかった。K夫は自分達の為に用意されたものと受けとめて、校長先生とお母さんの前にそれを運んだ。食べることのあまり好きでないK夫にとっては最大のサービスだったのだろう。校長先生が、「そこにおいておきなさい、そのまま、そのまま」と手振りで制するのも知らん顔でお茶とお菓子を運んでしまった。校長先生が、「お話ししましょう、ここへ座って」と言われると、「どうして、どうして」と落ちつかなくなった。「こんなことではとてもうちでは見られない」と言った。「知能はありますが、しかし、言うことを聞かないからね、学校では見きれない」と言われた。お母さんは、「お願いしまし」と頭を下げて帰ってきた。教育委員会で

は、「普通児として堂々と学校へ行きなさい」と言われる。校長先生の話をすると、「その時の校長の気分が悪かったのだらう。学校長になるぐらいの人なんだからそれだけの人格はある。その時だけの態度で校長先生を判断しては可哀想だ」と言われる。

三月三日

学校から電話があつて再び行く。新校舎の工事中なので落ちつけないのか、「坂がある学校へは行きたくない」と言う。「お座りなさい。お話ししましょう」と言われるが、始めちょっと座るとすぐそこらじゅうを走りまわる。「これじゃあ、とてもうちでは見きれません。普通のお子さんだったら、言えばちゃんと座りますよ」と言われる。室内の重苦しい空気がいやになったのかもしれない。「これじゃあ、とても駄目ですね」と言われる。



副校長先生もいらつして、「何か物を与えれば落ちつきますか?」と言うので、(物ではない心と言つて欲しい)「口で言えばわかります」と話す。「学校はお母さんのように一対一で話すわけにはいかない。そういうことをお望みなら特殊へ行かれた方がお子さんの為ですよ」「まだ入学してないからうまくゆくかゆかないかわからないのでは」と言うと、「今、見たところではとても受け入れられません。一クラス四〇人前後ではとても目が届かないし、一緒に座っている子も落ちつかない。授業中おもしろくないからと一人で教室を出してしまうと、先生は授業を中断して捜さなければならぬ。第一父兄がだまっていけないだろう」「幼稚園ではうまくいっています」「私達は専門家ではないのでよくわかりませんが、幼稚園と学校ではやっていることが違う」「……」「専門に勉強している先生の方が本人

の為ですよ」「委員会では充分普通学級でや
っていきけると言われます」「委員会では特殊
ということと書類がまわっています」「そん
なこと聞いていません」「しかし、まわりの
迷惑を考えたら連れてこれないでしょう。委
員会は現場のことを知らないからなあ」

「迷惑」とは一体どういうことなのだろう。
お互い人間どうし迷惑をかけあって生活して
いるではないか。校長先生は最後に、「誤解し
ないで下さい。入学するのはあなたの権利で
すから、入りたければ入学式に連れていらっ
しゃい」と言った。K夫は、「おうちに帰りた
くない。お散歩しよう。電車に乗ろう」と言
った。

よっぽど傷ついたのでだろう。幼い子どもの
前でよくもよくも話せるものだ。学校とは、
人間になる為に学ぶところではないか。教え
るとは希望を抱かせること、学ぶとは、真実



を胸に刻むこと。その入口で心を踏みつける
のか――。次の日、K夫は幼稚園に來なかつ
た。

三月四日

委員会から電話があり、昨日の話をすると
特殊の書類などまわしてない由。面接で落ち
つかなかったことを話すと、「K夫君は、感受
性が強いから、犬や猫の様に自分の事をよく
思っていない人間を感じるのではないか」と
言われる。「私としてはあまり拒否される所
へは入れたくないのですが」とお母さんが言
うと、「校長先生がおっしゃるように、入れな
い、と言っていないのだから、それは我儘だ
よ」と言い、それから、「○小学校ばかりが
学校じゃあないし近所の所へ行って聞いてみ
たら」と言われる。

三月五日

T先生が、「K夫ちゃん、昨日どうしてお休みしたの？」と聞くと、「かなしかったから」と答えた。

三月六日

○小学校の説明会なので行くと、入口の名簿にK夫の名前はすでになかった。

国際児童年に、「国民は平等に教育を受けることができる」と定められた。そして養護学校ができた。地域の子どもは地域の子どもどうしで守られていくのに、遠い所の学校に通うはめになった。自分と違ういろいろの子どもがいるということが「共に生きる」教育の原点である筈なのに、特殊学級といっても訪ねていくと何か疑問が残る。二十数年前か、学力テストとその評価に反対して辞表をだし



た中学の先生が、その人柄に傾倒した校長先生の推薦で、障害児学級の先生になった。

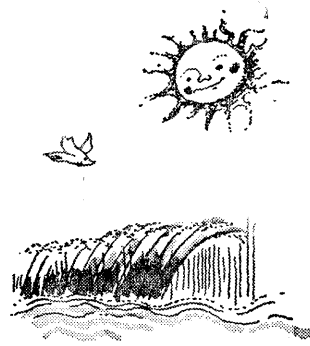
「ここに三日いると可愛いくて辞められないね」と言った。その先生の話聞いて学力で人間を差別しない本来の人間教育がここに残されているように思えてその言葉に縋っていたが、K夫のような場合を見ると、心が揺れ動く。集団の中で友達どうし育ち合い、友達と遊ぶことによって自分を変えていく。障害を持った友達と一緒に生活していくことによって誰からも教えられないやさしさが、クラス全体を包む。

K夫は寄留しバス通学をして普通学級を卒業した。卒業式に出席した私はそのたくましい姿に感動した。○小学校の校長先生が言われた心配は低学年の頃の給食を除いては六年間、全くなかった。

(市ヶ尾幼稚園)

メイド・イン・神さまの 子どもたち

山下史路



ある。欠点だらけの人間が人間を育てるのだから恐いものだ。その上現代は、従来の常識がくつがえされるようなことが、学校や幼稚園で起きている。「エーウッソー」と叫びたくなるような事柄に今までわたくしも出会った。それを書いてみる。

我家には小学校六年生の息子が一人いる。ということ
は、わたくしは子育て十二年のキャリアアママということ
になる。一つのことを十年も学んでくれば、大体どこの
世界でも一人前になるけれど、いまだに子育ては難し
い。子供が小さい頃は肉体労働であったが、成長するに
つれ、精神労働に変化してきているから、なおのことで

その一。幼稚園に入れる年齢になって、近
所の幼稚園を見学に行った時のこと。まず園
庭にあるカラフルな遊具が目飛び込んでき
た。遊園地に迷いこんだのではないかと錯覚
しそうであった。幼稚園の先生方は、「遊びを
通して創造力を伸ばしましょう」とカッコよ
くおっしゃるが、できあがった遊具で創造力が伸びるだ
ろうか。また幼稚園と遊園地にある遊具が同じならその
違いはどこに……。どのチャンネルを廻しても、ダイア
ナファッションや聖子ちゃんの結婚式しか流していない
テレビ界の貧困な発想と同じように、これではワンパタ
ーンの思考回路の人間しか育たないのではないか。

その二。我家の息子は小さい時から絵が好きで、毎日動物や乗り物を熱心に書いていた。保育園に入ってから、園から帰るとせっせと書いていた。ある日その絵を先生に見ていただきたくて、子供は得意げに持って行った。それを見た先生は、「この象は○○ちゃんの影響で、この魚は○○ちゃんの影響で、この亀は保育園でかっているからです」とまるで子供の頭の中全部が見えているかのようにしゃべった。子供はがっかりした。これではまるで息子は人の影響だけで生きているカラッポ頭の人形ではないか。以前から象も魚も書いていたし、亀は家でもかっていたのに。子供のやわらかな心は、ガリガリ頭の先生にズタズタにされたような気がした。

その三。小学校に入学して「学校のきまり」に驚いた。まず「集団登校をし、きまった通学路以外歩かないこと」というのがある。わたくしの子供の頃とは交通事情も違い、安全対策ということなのだろうが、一歩外に出た時点から、もう学校の管理下にあることだ。通学途中のみち草がどんなに解放的で楽しかったことか、など

というのは感傷的だと一笑に伏されてしまふ雰囲気だ。

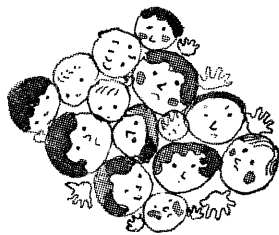
また「校庭で遊び時間に野球やソフトボール、サッカーをしない」というのがある。これも生徒たちにケガをさせまいという学校側の配慮なのだろうが、いったい子供たちは何をして遊べはいいのだろうか。また「一年生は自転車に乗ってはいけない。二年生は保護者の目の届く範囲で乗ること」というのがある。前の二点は事故を起こした時親たちが、学校側の管理不行届として突き上げてくることを恐れての先手行為と考えられるが、後の一点については、どう考えても学校側の越権行為としか思えない。この六年間いまだに「学校のきまり」は変更されていないのか、学校に言っても変わらないとあきらめているのか、定かではないが……。「子供を過保護に育てないようにしなせう」と先生がたはよくおっしゃるが、子供や各家庭が判断すべき内容にまで言及し、「きまり」ということで押しつけてくるのは、子供はもろんのこと、子育てをすることで一緒に成長するであろう親までを

も、潰していることにほかならない。父母も知らず知らず親の責任を放棄させられていることになる。

その四。幼稚園や小学校の学芸会で主役がゾロゾロ出てくることに驚いた。皆平等に体験させたいという園や学校側の配慮なのだろうが、なんとも気持ちが悪い。人間は法の下では平等だが、能力や才能のあるジャンルは、人それぞれ違う。ある子は運動が得意であるが音楽が苦手であるとか、音楽は得意であるが勉強は苦手であるとか、勉強は良くできるが運動は下手であるというように。それがありのままの姿ではなからうか。他者との違いを知るためにも、個性を伸すためにも、真の平等意識を育てるためにも、お互いの長所短所を認識するところから出発しなければいけないのではないか。苦手なことまで皆と同じように自分もできているのだと思わせられて育つ方が、より残酷なのではないか。平等を乱用することで、何が見えるだろうか。それは幻想にすぎないのではないか。学芸会や運動会でたとえコンプレックスを抱いても、悪い結果になるとは思えない。劣等感を

抱くことが、他人の痛みを理解できる人間になり、悩むことで考える大人に成長するのではないか。ただ明るいだけの人間なんて気味が悪い。今ネクラ人間が嫌われているのは、誤った平等意識の乱用の結果ではなからうか。

その五。学校の音楽会で子供たちが唱う歌に、テレビ



マンガのテーマソングがよく出てくる。また学校から渡される遠足等の歌集に流行歌、歌謡曲のたぐいも「生徒の希望」とかで載っている。音楽会のために数ヶ月練習する曲が、美しくもないテレビソングとは情けない。それならば別に学校の音楽の時間などなくても、家でテレビを見ていればいいではないかということになる。街に氾濫している流行歌は、放っておいても耳に入ってくる。だからこそ学校の音楽の時間は、芸術の香り溢れる美しい音楽に触れさせる場であって欲しい。また「選曲は子供に任せた」と先生がたは責任回避なさるが、選ばれた曲が適当でないと思われれば、そこで先生がたの見識や指導力を発揮していただきたい。そういう時こそ、「先生」は必要なのではないだろうか。昔から言われていることだが、骨董品店の丁稚は、主人から本物だけを見せ続けられてゆくうちに、偽物が判別できるようになるとか。それと同じで、子供たちに、本当に美しいもの、善いもの、真なるものを教え続けることが教育なのではないか。

その六。サトウサンペイ氏の朝日新聞四コマ漫画にこんなものがあつた。学校の個人面談の場面で、先生と母親がむかいあつて座っている。母親が先生にむかつて、「しつつけをしっかりとってください」とお願いし、先生は母親に、「勉強をさせてください」と言っている。この漫画のように学校と家庭の役割が逆転しているという笑うに笑えない事実がある。今はこの漫画以上に事態は進行し、「勉強は塾に行つてしてください」という感さえする。というのはこの春、我家の息子が塾の春期講習に行った。親の方は塾を毛嫌いしていたのだが、見直すようなハメになった。塾から科目別クラスの平均点と本人の平均点が各先生のコメント付きで郵送されてきたからだ。考えてみれば、息子が行っている小学校では、この六年間に一度も平均点が出されたことはなかった。わたくしが小学生だった頃、毎回クラスの平均点と自分の点数が答案用紙に書かれていたものだ。当時は一学級五十数名いたので、現在（四十名以下）より大変であつたらうと思われる。子供が学校から持って帰る答案用紙と成

績表が、どうもピツタリこず、クラスの中で、学年の中で、勉強においてはどのような位置にあるのかつかめなかったのは、この平均点が解らないことであつたと気がついた。

今まで体験した中で、印象的なことを取りあげてみたが、こういうことはどの学校でもあるようだ。否むしる定着化しているといつた方がいいかもしれない。周囲の親たちは「いちいち驚いていたら身が持たないわよ」などという。あきらめムードでやり過してしまっているようだ。このような形で、どんどん親の感性も鈍らされてゆくことは、恐い。当然その影響は子供に現われるのだから。

また先生方も、「近頃の親はうるさいから」と、事なかれ主義におちいることなく、先生としての誇りを持ち、高い理想にむかつて教育をしていただきたいものだ。

現在の教育現場の荒廃は、大人一人ひとりの中に、夢や理想が消えてしまったことにあるのではないか。昔わた

くしたちは、先生や親から、理想を聞かされて育つた。その理想が、現実の世の中を知った時、悩む源になつた。理想と現実が自分の中で葛藤することで、大人になるのではないか。今はそのハードルさえない。現実主義者ばかりだ。現実主義者を世間では大人というけれど、わたくしはそれは誤りだと思う。理想を持ち、現実を把握できる人のことを一人前と考へたい。第一夢や理想のない人は魅力に乏しいのではないか。現代は夢や理想を持ちにくい世の中だということは、重々承知の上だけれど……。

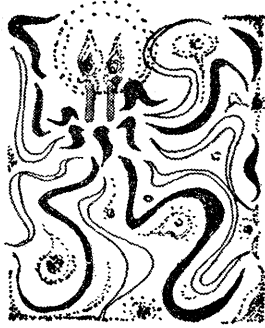
子供時代の教育が大切だとはよくいわれることである。だからこそ、幼稚園は幼稚園らしく、学校は学校らしく、先生は先生らしく、親は親らしく、その役割を果すことで、メイド・イン神様の子供たちは子供らしく育つのではないだろうか。

(練馬市民大学代表)

若いお母さんたちへ

がんばれ三組——

母さんたちの応援歌



はるにれの会

友定啓子

一九八五年は私にとって思いがけない豊かな年になった。いま私の子どもは小学三年と一年になった。わが子が幼児時代を終えてしまったことは、私にとって少なからず残念な事であったけれど、小学生時代もまた親という立場で紡ぎだすものがあるということ、この一年間で学んだような気がする。

昨年の七月、夏休みを目前にした保護者会で二年二組の親たちは驚いてしまった。先生から一つの事件が報告されたからである。「一人の女の子に二十人の男子がかかっていた」というのである。そのことをめぐるさまざまな論議の末、一人の母親から「こんなふうにかか事がおこらないと、そのまま一日一日が過ぎ

ていってしまう。それでは何だかこわいような気がする。月に一度でもみんな話し合える場がほしい」という意見が出て、むずかしいかも知れないけれど、希望者だけでもいいからやってみようということになり、その場で四人の世話人が選ばれ、その中の一人に私も入っていた。

世話人がまず一致したことは、「夏休みの最後の日曜日に、親子が遊ぼう」ということだった。その時、私は以前からウォークラリーというものをやってみようと思っていたので、それをやってみようと言った。しかし、私思うと、このウォークラリーの一言があんなについてまわるとは思わなかった。平凡にカレー炊飯ぐらいにしておけば、事態もまた変わっていたと思う。私も無謀と楽天性を旨とする人間なので、ウォークラリーの一つや二つなんとかなると思ひ、まずその道の権威をさがし求め、市内の高校の体育の先生に教えを乞うた。どうも聞いていると本式のウォークラリーは地図を使う、おまけにコース設定に相当の経験がいるらしい……。ウーン、

と思わずうなった。二年生は地図が読めない、それどころか、東西南北もわからない、状況によっては左右も間違えるわけだから、これはたいへんだ……。ただ、要するに、ある一定のコースをタイズを解きながら目的地に着けばよいということだけは納得した。その主旨にそって二年生版をつくれればいいわけだ。さいわいなことに（？）、誰も本式のウォークラリーを知らないもので、大胆にアレンジすることに何の抵抗もない。地図は文章に置きかえ、左右だけを使って、コースを二年生の体力と知力に合わせて設定することにし、先生に左右の特訓だけをお願いして、ラリーのことは私にまかせて下さいと安うけあいをして、結局、九月一日に「ウォークラリーとカレーライスのつどい」をやることに決定した。クラスの子どもたちが、グループで協力しながら楽しく一日を過ごせるように、同時に、親は我が子だけでなく他の子どもたちの姿、あるいは子どもたちの関係を見ることによって、視野を広げられるようにという願いをこめてである。このお知らせプリントは、『がんばれ！ 3組、第

一号」と名付けられ、三月までの間に計五〇ページも発行され、親と子と先生の間をつなぐ役割を果たした。

それからがたいへん、世話人グループは出席確認、親の役割分担、カレーの材料調達、道具調達、コースの設定、下見、クイズづくり、指示文づくり、安全体制の確認、そして数人の子どもを呼んでのリハーサルとまあ忙しく活気のある夏休みになった。世話人たちはお互い知らない人達であったし、大人数の行事を用意するのははじめてで（何しろ出席をとったら一〇〇名をこえてしまい、驚き、喜び、かつ、おののきつつ）、いろいろと準備の段階でももしろいことがあった。

ラリーのコースは、学校から四キロほど先の山の中腹を最終目的として、二つの神社と一つのお寺をまわりながら、クイズをといっていく。八月中旬に子ども五人と親四人で時間を測定してみる。時間、コースに大きな問題はなかったが、子どもたちは思わぬところでとまどった。学校から北上して、東西に走るバイパスの地下道をくぐって地上に出た時、方向を失ってしまった。「まっ

すぐ行くと『朝倉』というバスていがあります」という指示文だったのだが、地上に出たとたん、広いバイパスの方向にむいてしまい、おまけにそこにバス停が見えたものだから、リーダー格が「あっちだ！」と叫んだ時には、他の子どもたちがドドドッとそれについて行ってしまった。バス停の前で首をかしげている。バス停の名前が違うのである。すると、それまで静かにしていた五年生のお姉さんが、「あっちから歩いてきたのだから、まっすぐというのはこっちではない」と言い出してやっと軌道修正された。私達はそれを見て、「親は後ろからついていくが口は出さない」という約束を「十分間は口を出さない」ということに変えた。また、バス停の裏に回ってキョロキョロしているので、どうしたのかなと思っていると、バス停の名前がどこに書いてあるのかわからず、さがしていたのであった。この子たちにとって、自分の判断で町を歩くことは珍しいことのようにだ。

さて、カレーの方だが、これも子どもたちと一緒に作ると楽しいのだが、一日の行事に二つの内容をもりこむ

のは難しいという意見から、今回は親が作ることにし、百人分のごはんを炊く練習をしなければならぬ。幼児もいるので八升としてどうやって炊くか、五升と三升のカマとカマドをなんとか調達して、これまた集まれる人だけ集まって炊いてみた。結果は、上はまあまあ、下はまっ黒、中はカチカチという炒飯専用ができてしまった。量が多すぎて熱が均等に伝わらない。昔の人は一体どうして炊いたのだろう……とカマを前にしてふしぎだった。それでも、本番には少し火加減を注意すればなんとかなるでしょうということになり、できそこないの大量のご飯を譲り合いつつみんなで分けて持って帰った。

あれやこれやと大きわざをして、九月一日を迎えたのだが、なんと、いくら二百十日だからといっても、三つの台風が一べんに来てしまったのだ。前日、二つの台風をやりすごしてのくもり空、三つ目が来るというニュースを前にして、いくらなんでも決行できない。朝、無念の中止連絡をした。

二学期は始まったが、こんなに準備したことをすてて

おくわけにもいかず、百名の期待をせおって(?) 九月十六日に延期、再びお知らせプリント、出席確認と動き出し、「また、雨が降ったらどうしよう?」……みんな下を向いてしまった。その時は、ゲーム大会とカレーにしようということにして、準備を進めた。しかし、どうも気になるのはご飯のこと、楽しみのカレーがカチカチご飯だったら……と思うと心配になり、再び、ご飯炊きの練習。今度は、調理の先生に相談して、「お湯炊き」という方法を教えてもらった。半信半疑ながら、分量のお湯を沸かして、そこへ一気にお米をあげ、かき回して炊く。結果はバッチリ! 内部までちゃんと炊けた。よかった、よかった、これでみんなに食べさせられると喜んでるか……。やっぱりもらってくれそうな人達の家を回って配って歩いた。この時のことは今でも「白い恐怖」と語り草になっている。おかげで、私達は大量のご飯炊きにはガゼン自信を持って、本番よ早くこいという気分だった。

しかし、前日の天気予報は「くもり、ところにより雨」。ウーン、だいたい山口に十年住んで、こういう天気予報の時は、そのところに入って雨が降ることが多いことがわかっている。前日集まったみんなはくもり空を見上げては、ため息。結局、晴れた場合と降った場合の二つの用意をすることになった。ゲームの方は全く用意していないので、急ぎょ二、三冊のゲームの本を持ち寄って、グループで協力しなければならぬもの、個人の力量が勝敗に結びつかないもの、お互いに親しくなれるものという基本線を出してプログラムを組んだ。夜、あまり布を持ち出し、ハチマキを作りながら、私の頭の中は晴れたらこう動いて、降ったらこうなって、という段どりがぐるぐるとうず巻き、ハレツシそうであった。

そして翌朝、雨の音で目が覚めた。早朝、世話人たちは、電話で「がんばろうね」「もうヤケだ!」と落ち込みそうなところを励まし合って会場に向かう。それでも、中止にして窓から外の雨をながめているよりはマシであった。時刻になり、雨の中次々と親子が、小学校の

講堂に集まり、親たちはカレー係とゲーム参加に二手にわかれて動き始めた。ご飯は、電気ガマで炊いたものを百人分集めた。講堂では、ゲームのつどい。進行、くり出し、採点など、一夜漬けのプログラムにあたふたとかけずり回る世話人達を見かねて次々と手伝いが出現した。

ぼくが、いちばんたのしかったのは、クイズでかいたものがたのしかった。クイズのヒントは、めちゃくちゃだった。ぼくは、さいしょ、わからなかった。なんかいもよみなおして、やっとクイズがとけた。答えがわかった。答えは、ピンク色のボール。いそいで、ピンク色のボールをとりに行った。でも、にんさんぎやくをしていたから、こけそうになっ

た。
きのう、おや子ゲームで一ばんおもしろかったのは、しんぶんしじょうです。しんぶんをはんぶん

おっぺおいて、そのうえにのるのです。

せんせい、いもうとのみかをかたぐるまして、わたしをおんぶして、さいごには、ちずさんをあきえださんのおねえちゃんがかたぐるまをして、それを、せんせい、だっこしました。すごいばかぢからでしたんだ。これこそ、かじばのばかぢからだ！

しんぶんしが、八ぶんの一になった。一番になった。すごかった。

というわけでゲーム大会は、最後には、子どもたちが進行役を「もう一回コール」とりかこむシーンも出て終了した。

しかし、子どもたちはウォークラリーを楽しみにしています、と先生からも言われるし、他の親からも出るラリーをやらぬことには私達世話人はやめられないような状況であった。が、ここらでちょっとひとやすみ。十月は、先生を囲んで懇談会。自由参加で十五人の出席で、日頃の子どもの様子を報告し合った。

そして、十一月四日、悲願のウォークラリーが実現した。晴れてくれただけでうれしかった。とは言え、全くの初体験で、私はタイム係として一グループづつスタートさせながら、無事に行ってくれるように、と祈るような思いだった。

日曜日の九時半、学校を出ました。はじめのクイズは、学校にあるくすの木のことでした。つぎは、バスのちかどうの出口のかいだんをかぞえるのでした。三十六だんありました。つぎのクイズは、じんにゃにいて、犬のもんだいでした。二ひきとも口をあけているか。二ひきとも口をとじているか。一ひきはあけて、一ひきはとじているかでした。こたえは三の一ひきはあけて、一ひきはとじていました。それからめがねのみきをすぎてきどじんにゃにつきました。おちゃとあめをたべて、五分間休けい。そして山をのぼっていききました。そして、八ばん目のたてふだになんとかいてあるかでした。

れんきゅう、きょうは、とつてもおもしろかった。ウォークラリー、たのしかったよ。ゲームがおもしろかった。どっちぼうるのなげるのがおもしろかったよ。カレーおいしかった。カレーだいすき。かえるとき、学校までくるまにのせてもらった。おもしろかったウォークラリー。

待ちに待ったウォークラリーは朝の内は冷え込みましたが良いお天気でした。引率をした時の様子は、男女共に仲良くとはいかなかったのですが（男の子はてれ屋なところが出ていたのか、なかなか顔を合わせて絵を見ていなかった）、長い道のりを目的に向って進みました。久し振りに親の私達も歩くことを体験し、お話をしながら、少しはよそのお母さんと近くなったようです。おいしいカレーを作るためにお母さん達の力を一つに合わせ、本当に「母の味」が出来ました。コーヒータム、子どもたち

はお父さん、先生にまかせっきりで、色んなお話をしながら、この会に参加するうちに、回を重ねて、こんなにお母さん同士も仲良くできて、良かったと思います。参観だけでは、こんな風に色んな話は出ないし。良い集いがありました。

当日、終わって家に帰ってつい口に出るのが、「あー、終わった！ 終わってよかったー。」実はこの日、私の三十ウン回目の誕生日だった。私は娘やその友達から誕生日カードをもらった。「おぼちゃん、ウォークラリー終わってよかったね。カゼひかない、じょうぶな親になってね。」

さて終われば終わったで打ち上げがいる。子持ち故、日を改めて十五人程集まった。二次会でカラオケなど楽しみ、ついでにボトルまでできてしまった。そしてその後、今度は世話人を慰労する会を開こうと別のお母さん達がアッと言う間に呼びかけ、またまた食べる会が開催され、私達は、桜草の鉢植をもらった。そんなわけで、

二学期の最後の保護者会は親しみが増して、自分の子ども様子などざっくりぼらんに話せるようになって、色んな討論ができた。はじめに提案していた、お母さんの望んだことが実現したのだ。そして三月のお別れ会には、親も何かやろうということになり、その日、インスタントママさんコーラスが出現した。

こうして書いてみると、まあ、よくやったと自分でもあきれる。でも、こうしようと思っていたのではなく、その時々々の展開にまかせたままだったのだが、世話人四人プラス役員二人、みんな個性的で(全然似ていない)自然に補い合う形で動くようになったことが体験してとてもよかった。Aさんはガンのおじいちゃんと同居で、この間に亡くなられたし、Bさんは先天性の内臓障害を持っていたし、Cさんは息子さんが入院、Dさんは他の世話をたくさん引き受けていたし、私やCさんは仕事持ちだった。それぞれにしんどかったのに(から?)集まることで、力が出せたという気がする。言うまでもなくこの楽天的な母さんパワーに見事、こたえて下さった先生

がいる。そう、一番しんどかったのは先生である。なぜならその後も、子どもたちは様々な失敗をくり返し、その都度、手当てに歩いて下さった。親が仲良くなっただけで子どもたちがよくなる、と単純には言えないし、まだまだ肝心のところまで、手が届いていないのだが、ただわかっていてることの一つは、私達親が一番ほしいのは、子どもたちに何かあった時、一緒に悩み、助け合える人間関係だということである。

そして今、クラスは離ればなれになり、新しい学年へと進んだ。しかし、この人間関係の輪が根づかせ、広げることをもと三組の母さん達は約束し合っている。

季節はずれではあるが、夏休みに大ヒットした映画を見にいった。久しぶりに見る子供の映画である。テレビでさかんに宣伝していたが、その時の主役の猫の表情、しぐさがかわいらしく、多くの人をひきつけた。

北海道の大自然、四季おりおりの風物、画面いっぱいに躍動する動物たち。猫、犬、熊、羊、豚、鹿、日本でみられるほとんどの動物が出演する。動物だけで人間は一人も出てこない。

しかし、人間が姿をあらわさない画面から強烈に感じられるのは、皮肉なこと人間の手なのである。犬が友人の猫を助けて熊と闘う。犬が猫を助けるために川にとびこむ。猫が尻尾で魚をとる。自然界ならばありえないことが画面では進行する。

見ているうちに段々腹がたってきた。「この映画を製作するのに、何匹の子猫が死んだか知りたい」と発言していた人

のことを思いだし、ますます腹をたてる。腹をたてながら、考えてみる。こんなに腹がたつのは、私が年をとってしまつたからであろうか。子供のころならば、画面に人工的なものは感じず、感動して見入ったのだろうか。

そう思つてまわりを見回す。つきせいの大人は舟を漕いでいる人が多い。隣の女の子がぐずつきだした。「はやく終わればよいのにね」とお母さんに話しかける。始まる前まで「猫さん、かわいいのよ」とはしゃいでいたというのに。結局彼女は最後まで見ずに出ていった。そんな親子づれが4、5組はあった。それを見て、なんとなくほっとする。

女、子どもにも受ける映画はヒットする、という。確かにこの映画はヒットはしたかもしれない。しかし、彼らは決して高い評価はしていないのである。

幼児の教育 第八十五巻 第十一号

十一月号 ©

定価四〇〇円

昭和六十一年十月二十五日 印刷
昭和六十一年十一月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

保育の再点検 <全5巻>

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著



- ①望ましい生活習慣
- ②望ましい集団づくり
- ③望ましい当番活動
- ④望ましい行事と生活
- ⑤望ましい言葉の指導

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きっと役立つ<全5巻>です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

A5判・セットケース入り・各208頁・セット定価6,750円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

子育てに関わるすべての人々に、 深い感動を呼ぶ人間ドキュメンタリー。

重い脳性まひの娘がかえってその母の人生の幅を大きく広げた。母は困難を超えて独力で保育所を作り上げ、子育て・人間・人生について誰よりも深い真理に触れた。この2巻は『障害児の娘と保育の仕事と』の著者が、自らの生い立ちから娘の出産・人生の転換を経て、心身障害療護施設の設立に成功するまでを綴る半生の記録であり、子育てに関わるすべての人々に深い示唆と感動をもたらす人間の記録である。



人形棚の白い靴

— 障害児の母となって① —

- 著者自身の生い立ちから末娘・友ちゃんの誕生。絶望と不安、障害のある子を育てながらも仕事を続けたいと願う心の揺れ動き。そして、決断。独力で保育所を作り上げる。母として、保母として障害児保育の勉強に意欲をもやす。



ありがとう ごめんね

— 障害児の母となって② —

- 友ちゃんの入学。さまざまな障害を持つ子らの発達に応じてなされる教育の現場の姿。そして、友ちゃんの卒業後の生きる場を保障したいという願い。それは、親亡きあとも安心して生活できる場を作る活動へと発展。奔走は実を結び、多くの後援者を得て心身障害療護施設『麦の家』設立に成功する。

高城山保育園園長 土屋多喜栄・著 四六判・各巻256頁・定価各1,200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館